

ハクソー・リッジ

人間の尊厳を守り通す主人公

恥を忍んで告白すれば、「ハクソー・リッジ」が沖縄の激戦地（前田高地の絶壁）のアメリカ側の呼び名だったことを知らなかった。

沖縄戦の悲惨な映像は、崖から飛び降り自殺する女子や、火炎放射器で洞窟を焼き尽くす米兵、白旗を掲げたやせ細った日本兵の姿など、白黒の記録フィルムで見知っていた。

この戦場に武器を持たず、衛生兵として参戦し、多くの負傷兵を救った男の実話がこの映画だ。男の名は、デズモンド・ドス。

良心的兵役拒否者だったが、戦後、アメリカ史上初の名誉勲章を授与されたという。

主人公ドスを演じたのが、アンドリュー・ガーフィールド。「アメイジング・スパイダーマン」や「沈黙—サイレンス—」に主演。

監督はキリストの受難を描いた映画「パッション」や「アポカリプト」で、僕の心を揺さぶったメル・ギブソン。

映画は前半、ドスの少年時代の兄弟げんかの過ちや、酒癖の悪い父（戦争の心の傷）、の母親に対する

る暴力のエピソードを描きながらドスの人格形成を描いていく。

病院で一目惚れした彼女とデートし、結婚を申し込むシーンから一転、ドスは軍隊に志願する。過酷な訓練の中、彼はかたくなに銃に触れることを拒否する。

上官から命令されても、隊の仲間からいじめられても彼の宗教的信念は変わらない。

ついに彼は軍法会議にかけられるが、沖縄戦に参戦。そこで見たのは、何度も攻撃をかけた敗走した米兵士たちと、トラックで運ばれていく負傷兵や死体。戦闘シーンは圧巻。洋上からの艦砲射撃の圧倒的迫力。日本兵たちの必死の抵抗、気迫が伝わる臨場感ある白兵戦。ドスの隊は撤退を決めたが、彼は一人戦場に残り、暗闇の中、重症を負った兵士たちを助けていく。

臆病者、変人と白い目で見られた軍隊の中で本当の勇氣と、人間の尊厳を守り通すドスの信念を曲げない生き方に、考えさせられる作品だった。

（絵と文・山下雄平）

シネマ気球

第37号 200円

シネマ気球©

編集兼発行人 関田孝正
〒270-0107
千葉県流山市西深井 339-2
TEL 04 (7153) 1533
FAX 04 (7156) 7122

映画はやっぱラストシーン

※映画の結末にふれていますので、未見の方はご注意ください。
ます。

みなさん、映画見えますか？ 月に2本は新作を見ましょう、とは淀川長治の名台詞でしたが、2本はやや少ないような気がして5、6本にはしたいですね。さらに、映画はやはり暗闇の中、スクリーンで見るといのが大原則だと思います。さて、今回、今まで見た作品の中でとくに印象に残ったラストシーンについてふれてみることにしました。何度見ても心揺さぶられる幕切れの数々を振り返ってみましょう。

まず最初は、みなさんご存じの西部劇『シェーン』(1953年 米ジョージ・ステイヴンス)。このラストは、少年の呼ぶ声を背にして去っていくシェーンの後姿で終わります。いくら少年が叫んでもシェーンは戻っては来ません。馬に乗ったまま去っていきます。だって、彼は流れ者のガンマンな



『第三の男』アリダ・ヴァリ

んです。あのまま少年の家庭に入り込むわけにはいかないわけです。父親も母親もいる家庭に、彼の居場所はありません。でも、その家庭の、奥さんの温かさ優しさによりと男心が揺れてしまします。そんな男の哀愁をアラン・ラッドが良く出していました。また、シェーンに憧れるそばかす少年がいます。その思いがストリートに伝わってきました。シェーンを何度も叫ぶ声は、西部の平原に響き渡りとても忘れられません。2番目の作品は、『第三の男』(1949年 英 キャロル・リード)のラストシーン。ずっと続く並木道をアリダ・ヴァリがカメラの方に向かって歩いてきます。ジョセ

フ・コットンが声をかけようと待っています。彼女は無視したまま通り過ぎてしまいます。残された彼はたばこに火をつけます。ここまで約1分20秒。そこにアントン・カラスのチャターが高まってエンドマークになります。これはちよつと辛いラストでしたね。コトンは友人の彼女(ヴァリ)を好きになってしまったのです。この友人が薄めたペニシリンを売るような闇の商人です。でも、彼女はそんなこと関係ないんですよ。恋愛と社会正義は別物なんです。友人を演じたのがあのオーソン・ウェルズ。これが、また、キメ台詞を言っちゃって、俄然はまっています。あれでは、どんな男前の役者をもつてきたとしても、かなわないと思います。コトンは、偽薬で苦しむ人たちを見せられ、ついに警察に協力し、ウェルズは撃たれてしまいます。そのこともあって、彼女は完全にコトンを無視したんです。でも、彼の気持ち、わかります。君は正しいことをし

門馬徳行

たんだ。君にふさわしい相手にきつと出会うから、と陳腐なことを言って慰めてやりたくまりました。この作品は一見、サスペンスフルな作りになっていましたが、裏を返せば、実は悲しいラブロマンスだったんですね。つづいて3本目は、フェリーニの『道』(1954年 仏 フェデリコ・フェリーニ)のラストシーン。最初見た時は、なぜ、あの荒くれ男が夜の海岸で泣くのか、わかりませんでした。酔っぱらって「ともだちはいらない」とか言ってた男がなぜ、号泣するのかがぴんときません。自分の人生経験のなさがもろにでて、理解できないわけです。一緒に旅を続けていたジェルソミーナ(ジュリエッタ・マシーナ)が病氣になったので置き去りにしてしまふ。そんな男がなぜ泣くのか。が、二度、三度見てるうちに、ここにはフェリーニの希望が込められていたんじゃないかな、と思うようになります。獣のような男の心にもあったのではないか、ひとか

けらのやさしさが、と。あの怖い顔のアンソニー・クインが、鎖を胸で切る旅芸人をやっているの、なおさらギャップの大きさに感動するわけです。死んでしまったジェルソミーナがトランペットで吹いていた曲を聞き、酒場で暴れて一人海岸に来て彼は、自分のしたこと、残酷さと孤独感が初めてわかったんですね。映画の中で、ジェルソミーナに綱渡りの芸人が言った言葉がずしんと心に残りました。「どんな小石でも世の中にあるものは何かの役に立つ」。ちょっとした知的障害があるのか、無学なのかはわかりませんが、あれは天使のような彼女へのメッセージだったのかもしれない。もう、これは涙なくしては見れないラストシーンのひとつと言えましょう。続く4本目は、『シベールの日曜日』（1962年 仏セルジュ・ブルギニオン）。このエンディングも、胸にぐざりと来ます。クリスマス

の夜、2人はプレゼントを交換するのですが、男は風見鶏を少女は初めて自分の名前を送るんですよ。男は戦争で記憶喪失、少女は親に捨てられた孤児という設定。今でいうロリコンとファザコンのすれすれのゾーンで、この監督は映画づくりをやっています。といつても、2人は公園で遊ぶだけなんだが、世間はそうはみません。大人たちは偏見の眼で2人を追い込んで、悲劇的な結末になっていきます。男には恋人がいて、嫉妬した彼女が公園で遊ぶ2人を、おもわず尾行して泣くのですが、女ころは複雑ですね。結局、社会に理解されない男は誤って警官に撃たれてしまいます。ひとり残された少女の叫びで、映画は突然終わります。「名前なんかもうないのよ。あたしはもう誰でもない……」。撃たれた男もかわいそうですが、ひとり残された少女も、男を守れなかった恋人の悲しみも同時に胸に迫ってきます。絶望的な幕切れで後味は決してよくありませんが、これも忘れられない悲痛なラストシーンです。アンリ・ドカエのモノクロ映像がいやがうえにもこの作品をパセティックにしましたね。……5本目はアラン・ドロンの『太陽はいっぱい』（1960年 仏ルネ・クレマン）。このラストも衝撃的でした。所謂、あつと驚くドンデン返しなんです。ドロンが空を見上げて「太陽がいっぱいだ。」と呟く。このセリフにもしびれましたね。彼は富も女も手に入

れて幸せの絶頂にいるわけですが、もう刑事が側にきていて逮捕寸前なのです。彼は気がついていないんですね。「でんわです。」と言われて画面から消えていきますが。この後、すぐ地獄へ落ちていくのですが、その落差が圧巻でした。完全犯罪をはかっても、やはり人間はミスをしてしまいます。本人のサインを真似たり、殺した男を部屋から運びだしたり、もう必死になりすまそうとしたんですが……。ドロンが殺人を犯すヨット上でのカメラ・ワークは緊迫感がありましたね。この映画の根っこには青年の貧しさや卑しさがあり、その役をドロンがやったということが共感を呼んだのでしょうか。また、ニーノ・ロータのテーマも効いてましたね。この鮮やかなラストシーンも落とせません。6本目は室内劇の『十二人の怒れる男』（1957年 米 シドニー・ルメット）です。このエンディングは静かでしたが、胸にしみこんできました。殺人の疑いをかけられた18歳の少年に対する評決をくだす12人の陪審員の話です。人を裁くとはどういうことなのか、という問いかけがテーマです。最初、一人だった無罪の判決がしだいに増えて、全

員が無罪の答えを出す熱いデスカッションドラマでした。陪審員の中には早く済ませようというけしからん輩もいます。最初に無罪を投票したヘンリー・フォндаが偉いですよ。彼はちゃんと自分の意見を持ち、みんなで議論しようと提言します。どこかの政治家に見てもらいたいです。長い話し合いが終わって、陪審員たちが表に出ます。今まで重たい室内シーンだったので、ほっとした開放感が画面からあふれました。そして、そこは雨上がりなんです。夕立で道路が濡れているんです。ここがいいですよ。陪審員だった老人がフォндаに名前を聞きます。そして、握手して別れます。他の人たちが町の中に消えていきます。とても余韻が残る結末だったと思います。7本目は『チャップリンの独裁者』（1940年 米 チャーリー・チャップリン）のラスト。あの有名な演説シーンです。この映画はヒトラー全盛期につくられたんですね。チャップリンの勇氣は凄いの一言に尽きます。ナチスを真っ向から風刺してるので、命を狙われてもおかしうはありません。自尊心が固まったヒトラーとムッソリーニのバカな椅子

争いを笑い飛ばしたり、痛烈な毒がいつばいありますよ、この作品には。ハンガリー舞曲に合わせてヒゲを剃るシーンは何度見ても愉快です。最後の演説シーンは当初はなかったそうですが、チャップリンはそれまでの役柄を捨てて（こんなこと誰もやりません。だってチャップリン自身になるのですから）生身の自分になって、6分間のメッセージを送ったのです。ファシズムの恐ろしさを糾弾し、全人類が平和のために団結する必要を訴えたのです。現代にも通じるチャップリン渾身の語りを、私たちは肝に銘じなければなりません。8本目は、「ローマの休日」（1953年 米 ウィリアム・ワイラー）です。王女（オードリー・ヘプバーン）がローマを去る日に記者会見が開かれます。そこでグレゴリー・ペックは自分の正体をばらします。でも、スクープはやめて秘密は守ります。王女が記者の一人一人に握手し始めるところからもう泣けてきます。順番がきてペックと見つめ合う王女。このクライマックスを2人の目の芝居だけでみせるんですね。さらに、その前にどこが一番良かった？と記者に聞かれた王女が「ローマ」と

答えるところに至っては、なんの文句もありません。王女と新聞記者、身分違いの2人の恋は成就しません。そんなこと2人もわかっています。ワイラーもなかなか切ないところをつきますね。会見が終わり長身のペックが靴音を響かせながら会場を去っていく、と彼は一瞬立ち止まり、後ろを振り返るんです。そして、また、歩き出す。このラストは言葉がでてきませんでした。味わい深い余韻の残る結末でした。9本目は「大列車作戦」（1964年 米、仏、伊 ジョン・フランケンハイマー）です。ドイツがフランスの絵画を自分の国に運ぼうとするが、フランスの鉄道レジスタンスの命を懸けた抵抗で失敗に終わる話でした。ラスト、蒸気がくすぶる中でドイツ将校と操車係長バート・ランカスターとの対決が印象的でした。将校を演じたポール・スコフィールドがナチスの横暴さと狂信さを見事に表現してましたね。彼がランカスターに向かって「絵画の価値などおまえにわかるはずもない」と吐くシーンもあって唸りました。彼は絵画のためだったら人命など、なんとも感じてません。対するランカスターは、多くの犠牲者の姿

に、美術品より人命の方が大切だという気迫が画面からほとばしってました。将校を撃ち倒した彼が、線路沿いを歩いていくラストシーン。ドイツ滅亡の予感に溢れた見事な結末でした。フランケンハイマーは男同士の闘いを描くのが得意な作家ですね。そして、最後にあげなくてはならないのは、言わずと知れた『ロッキー』（1970年 米 ジョン・G・アヴィルドセン）のラストです。この作品が公開された70年前後は、わりとひねった作品が多かったんですね。そこにこんな単純明快な映画が出てきたわけですね。しがたない3流ボクサーがチャンピオンに挑んでいく姿が熱く描かれています。だれにでもチャンスはある話、ずばりアメリカンドリームだとか言われていますが、決してそれだけの作品ではありませんでした。だからこそ、あれだけみんなに支持されたのです。最初に見た新宿の映画館では、映画が終わったらみんな拍手喝采でしたよ。観客も熱かった時代なんですね。戦い終えてリング上で彼女の名を絶叫し、エイドリアンと抱き合うラスト、もはや完璧なラストシーンです。典型的なハッピーエンドです。シルヴ

エスター・スタローンの演技はとても上手いとは思えませんが、気持ちはよく出てましたね。年離れたトレナー役のバージェス・メレディスや恋人の兄をやったバート・ヤングがきちんと脇を締めてました。ロッキーがほころびたトレナーを着てたところなんか、もう感無量でしたよ。……以上、それぞれ異なる印象を残したラストシーン（10本、王道、定番ともいえる作品が並んでしまいましたね）を選んでみました。いささか情緒的なラストシーンに執着してしまった感がありますが、どれも素晴らしいラストシーンに違いはありません。最近の作品は、ラストでずばりと言わずに観客に投げかけるものが多くなっています。それは、それだけ時代そのものが複雑化してきたことの表れではないでしょうか。ぼんと答えを出せない。だから、なんか、もやもやした印象が残るラストシーンになっています。もし、機会がありましたら、今度は比較的新しい作品のエンディングについてふれてみたいと思います。では、みなさん映画館の暗闇のなかで、また、お会いしましょう。映画は、やっぱりラストシーンですね。

シネマギャラリー 15

鶴田 聖

〔描き手からの蛇足〕 トールキンの『指輪物語』を読んだのはいくつだったか。読み始めはかなり退屈で苦労した記憶がありますが、一行が裂け谷（エルフの里）に辿り着く頃にはすっかり物語に引き込まれて、そのまま一気に最後まで読み進んだものでした。それにひきかえ今回のイラスト。一気呵成どころか締め切り大幅遅れの問題百出！ まったく現実にはキビシイです。



イラスト&
エッセイ

モーションキャプチャの魅力

中田好美

撮影技術の変遷

モーションキャプチャとは、人体や物体の動きを測定して、コンピュータに取り込む技術のことである。動きをデータ収集することで、歩行や動作の解析、筋肉や関節にかかる負荷などを数値化できる。映画、ゲーム、CGアニメの表現だけでなく、スポーツバフオーマンズの向上や、リハビリテーションなどの医療分野でも活用されている。

時代とともに進化し続ける撮影技術。その原点はいつなのだろうと、気になったので少し調べてみた。

モーションキャプチャの萌芽は、ニセフォール・ニエプスが1824年に発明した、世界初の写真画像といわれている。ニエプスは発明当時、カメラ・オブスクラ（ラテン語で「暗い部屋」という意味）という、風景を投影できる道具に関心を向けていた。19世紀初頭の風景画家たちが、遠近法を用いて

絵を描くため、しばしば利用していたという。カメラ・オブスクラの原理は、ピンホールカメラと同じで、箱の一方に空けた小さな穴を通じて、外の風景が暗い箱の内壁に反転し、映し出されるというもの。画家たちは、そこに映し出された映像を紙に写し取ることで、よりリアルな風景画を描いていたという。

ニエプスは、カメラ・オブスクラに投影された映像を光の効果によつて、紙や板などに固定できないかと考えた。そして試行錯誤の末、写真画像を金属板へ固定することに成功したのである。ニエプスは、太陽光を利用したこの写真技術をヘリオグラフィ（太陽で描く）と名付けた。ニエプスの写真技術をきっかけに、さまざまな研究者によつて、さらなる撮影技術が編み出されていった。

エドワード・マイブリッジは、高速度で撮影できる写真装置を発明。1878年には、この装置を等間隔に12台並べ、疾走する馬の

連続撮影に成功した。マイブリッジは、馬が走るコースにシャッターと連動させた糸を張り、馬が糸を切ると同時に、シャッターが下りる仕掛けを考案したので。人の目では見えない瞬間を写真に収めたことで、それまで考えられていた、「前足は前方に、後ろ足は後方に伸ばして走る」という概念を覆した。マイブリッジは、連続写真（写真を元に描かれた絵ともいわれている）をゾエトロープ（回転のぞき絵）に掛け、馬が走る様子をアニメーションのように見せたことで大きな反響を呼んだ。その後、撮影対象を馬から犬、猿、鹿、鳥、さらに人間の身体へと広げ、数多くの連続撮影を進めた。1887年には、世界初となる、動物の連続分解写真集『動物の運動』（原題『ANIMAL LOCOMOTION』）を刊行。マイブリッジの写真は、トーマス・エジソンに大きな影響を与え、「映画」を発明するきっかけになったという。エジソンは、キネトグラフとい

う撮影機を発明した後、キネトスコープという、のぞき眼鏡式映写機を1891年に発明した。映像フィルムの前後をつないで環にしたものが、蛇腹状に折り畳まれ、ボックスの内部にセットされている。それを自動装置で回し、電球の光で透かしたフィルムを拡大鏡で覗く仕組みになっている。ボックスに納められるフィルムの長さに制限があったため、1分以内の短い映像となっていた。女性がドレスを着て踊っていたり、男性がパンツ1枚で筋肉を見せるポーズをとったり。初めて目にする映像に観客は魅了され、台ごとに異なる作品を楽しんでいたという。このキネトスコープが商業利用の水準に達したことから、「映画の誕生」と称されている。

そして、このキネトスコープに刺激を受けたリュミエール兄弟（オーギュスト・リュミエール、ルイ・リュミエール）によつて、シネマトグラフ・リュミエールが1895年に開発された。エジソン

のキネトスコープは、一人しか観ることができなかった。リュミエール兄弟のシネマトグラフは、撮影と映写の機能を持つ複合映写機になっていて、スクリーンに投影することで、一度に多くの人々が鑑賞できるようになった。現在の映画上映の原点とされる装置が、このとき誕生したのだ。

リュミエール兄弟の作品には、演出という楽しませる工夫があったという。『水を掛けられた散水夫』（1895年）は、コメディ映画の始まりともいわれている。その内容は、男性がホースで水を撒いていると、後ろから来た少年がこっそりホースを踏んで水を止めてしまい、不思議に思った男性がホースを覗くと、少年が足を離し、その勢いで水が掛かってしまうというもの。映画は、ありのままの風景映像から、物語を感じる映像へと変わっていった。

その後リュミエール兄弟は、世界中にカメラマンを派遣し、約1500本の記録映像を撮っている。1897年〜1899年の間に『明治の日本』という、日本の風景や日常を撮影した映像も残されている。リュミエール兄弟は、世界の文化を映像として残すとい

う、とても貴重な活動を行っていたのだ。

リュミエール兄弟の映画を見た、ジョルジュ・メリエスは、映像の世界に魅了され、マジシャンとしての経験を生かした独自の撮影技術を編み出す。数ある作品の中でも『一人オーケストラ』（1900年）という、メリエスが一人七役として登場する映画がとても面白かった。7つの椅子が置かれ、メリエスが端から順番に座り、立ち上がりと同時に分身が残り、それぞれの楽器で演奏を始めるというもの。動画サイトで映画を観てみたが、息びつたりの七人のメリエスに、ただただ感動するばかり。この驚きの映像は多重露光という、フィルムを巻き戻して再び撮影する手法が使われていて、なんと7回もの撮影を繰り返している。一度でもミスをしてしまうと、最初から撮り直さなければならぬという、ものすごいプレッシャーだ。とても難しい撮影技術を見事に使いこなし、マジック映画としてたくさんの人々を魅了した。劇場主でもあったメリエスは、その経験を生かし、セット、脚本、撮影、演技などなんでもこなし、独自の世界観を作り上げていった。

その後『月世界旅行』（1902年）という、世界初のSF映画が誕生。天文学学会の一行が、月への探求旅行を計画。一行が宇宙船に乗り込むと、大砲で発射され、人間の月の右目に着弾。宇宙船を降りると、そこには見たことのない景色が広がり、三日月の女神や、土星の神様、月人などが住んでいた。宇宙船が月に近づく様子は、人間の月がカメラに向かって徐々に距離を詰めることで見事に表現。爆発や降り注ぐ雪、煙とともに月人が消える特殊効果も素晴らしい。近景、中景、遠景を意識したセッティングは美しく、当時の映画として驚きの連続だっただろう。1900年以上も前に、月世界を映像で表現していたことに、とても驚いた。今観ても面白く斬新な作品である。

メリエスは、多重露光、低速度撮影、ディゾルブ、ストップモーションという、撮影技術の開発だけでなく、ひとこまずつ手で色付けしたカラー映画も作っていた。動画サイトでは『月世界旅行』のカラー版も観ることができるので、興味のある方はぜひご覧ください。写真から始まった撮影という技術。人々を楽しませたい、新しい表現を追求したい、そんな探究心によって現代の撮影技術につながっていると思うと、偉大なる発明家たちに、ひたすら感謝と尊敬の念を抱くのである。

撮影の舞台裏

少し話題が逸れてしまったが、モーションキャプチャというものに興味を持ったきっかけは、昨年7月9日に公開された『キングスグレイブ ファイナルファンタジー15』というフルCG作品を観て、その美しさに心を奪われたからである。この作品は、『ファイナルファンタジー15』というゲームへつながる、もう一人の主人公を軸にして描かれた、アナザーストーリー。公開当時、ゲームの発売を心待ちにしていた私は、この映画がどのように描かれるのか、とても楽しみにしていた。期待を胸に劇場へ観に行くと、そこで目にしたのは、どこかぎこちない人間の動きや表情ではなく、限りなく人間に近い、魅力的なキャラクターたちであった。髪の毛の一本一本、息遣い、目の力強さ、繊細な表情などが見事に表現されていた。その後、ゲームと一緒にこの作品も購入した。特典映像には撮影風景が収録され、モーションキャプチャ

を用いた役者たちの演技を観ることができた。

スタジオ内には、CGで描く際に必要な動きを撮影するため、階段や椅子などのセットが使われていた。役者たちは、動きを測定する特製のスーツを着て、頭部には表情を撮影するための固定カメラとライトを装着。顔には表情筋を動かす部分に、球体のフェイスマーカーが付けられ、ライトを当てた反射によって表情の動きを測定する。

数ある撮影シーンの中でも、アーデン（エドワード・サックスビー）という飄々としたキャラクターの演技が印象的だった。役柄故、ややオーバーな演技となっているが、表情や立ち振る舞いで胡散臭さを醸し出し、その表現のひとつひとつがとても魅力的に感じた。役者たちの演技力がそのままキャラクターに生かされ、表情という難しい描写に、とても力を入れていたことが分かった。この撮影風景を観て感じたのは、衣装や風景などが無い状態で、どれほどの想像力を働かせられるか、ということであった。今どのような場面、どのような場所、どのような感情で……。想像しただけで頭がこん

がらがってしまう。

この作品は、実在するモデルや俳優がキャラクターとして描かれている。キャラクターにもよるが、モデルとなる人物、モーションアクター、ボイスアクターと3つに分かれたものを一人のキャラクターに集約している。映画に登場するキャラクターが実在するという、何とも不思議な感覚が忘れられない。ゲームの世界が題材となっているが、CGだからこそ表現できる、モンスターや魔法の世界。美しく迫力満載の映像は、一見の価値あり。

今までは、完成された映像ばかりに目を向け、その舞台裏を意識したことがなかった。この撮影風景を観て、モーションキャプチャを用いた作品がどのように生み出されるのか、非常に興味を湧いた。そこでモーションキャプチャを用いた作品をいくつかご紹介。

『キング・コング』（2005年）

冒険映画の撮影の為、幻の孤島スカライランド（髑髏島）を訪れた、舞台女優アン・ダロウ（ナオミ・ワッツ）、映画監督、脚本家一行。そこで目にしたのは、体長7・5メートルの巨大生物キング

コング（アンディ・サーキス）であった。

キングコングに連れ去られてしまふアンを軸に物語は展開する。キングコングが、アンを守りながら恐竜（バスタートサウルス・レックス）と戦うシーンは迫力満載で、キングコングの圧倒的な力の表現が素晴らしかった。恐竜の舌を喰いちぎり、並外れた腕力で上顎と下顎を外してしまう。本性むき出しの荒っぽさだけでなく、繊細な表情や動作によって、キングコングの感情までもが伝わってくる。

キングコングは、アンと戯れたくて指で小突くが、力が強いいためアンは倒れてしまう。その反応が面白く、繰り返し小突いているとアンは激怒。接し方が分からないキングコングは、もどかしい感情を木や岩に八つ当たりして心を落ち着かせる。このキングコングの動きや表情に、何ともいえない不器用さを感じ、とても魅力的に感じた。

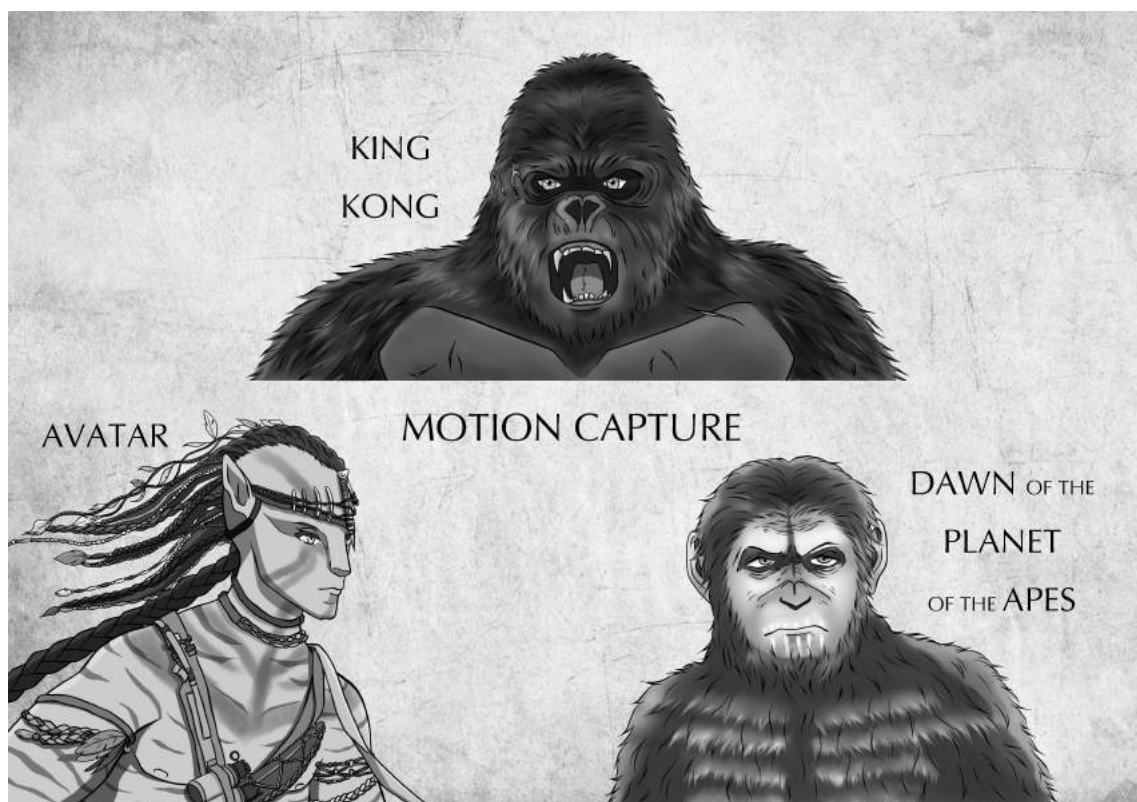
キングコングというキャラクターに感情移入できたのは、サーキスの名演をVFXを用いて、キングコングに再現できたからだと思う。モーションキャプチャの撮影では、特製のスーツを着て、キン

グコングの頭身に合わせるため、とても長い義腕を両腕に装着していた。キングコングの鳴き声もサーキスの声を生かしたものとなっていて、キャラクターを突き詰める姿は、素晴らしいものである。サーキスはキングコングを演じるため、野生保護区で飼育されているゴリラと触れ合い、コミュニケーションを取っていたという。ゴリラの習性や特徴を研究した名演に魅了される映画であった。

『アバター』（2009年）

惑星パンドラに眠る希少鉱物を巡り、ナヴィ族、人類、そして人類とナヴィを掛け合わせた人造生命体アバターによる抗争が描かれる。ナヴィ族のキャラクターデザインが魅力的で、人間と猫を掛け合わせたような容姿がたまらない。身体能力も現実離れという訳ではなく、3メートル前後ある体格を活かした動きで、狩りをしたり、

翼竜（イクラン）にまたがり空を自在に飛び回る。その生き生きと描写されるナヴィ族の姿に憧れを抱いた。物語終盤で施されるウォーペイントは、青い肌に映える、とても美しい色合いで、一度観た



ら忘れられないアートのようなデザインである。

アバターとなったジェイク・サリー（サム・ワーシントン）が、惑星パンドラで初めて目にするものの好奇心に、自己投影して観ていた。ふわりと浮かぶ白い生き物はどのような肌触りだろう、ウトライヤ・モクリと呼ばれる声の木に、フイーラー（尾のように伸びた髪の毛の先端部分）でつながり、先祖の声を聴く感覚はどのような感じだろう。パンドラの世界をジェイクを通して疑似体験するうちに、ジェイクというキャラクターが、自身のアバター（分身）となっていることに気づいた。観ている者をその世界に引き込み、想像して楽しむという、とても新しい感覚だ。

モーションキャプチャの撮影を観ると、役者たちの想像力が求められる現場であった。広いスタジオ内は全方位を囲むように、多数のカメラが設置されている。役者たちは耳や尻尾が付いた特製のスーツを着て、目に見えない景色を想像して演じなければならない。襲い来る巨大生物への恐怖や、翼竜で飛び回る疾走感、初めて目にするものへの感情など、様々な場

面を全身全霊で表現していた。役者たちはパンドラの世界を想像し、目や耳で感じ取れるほど、感覚が研ぎ澄まされていた。映画を観ているときは、キャラクターがパンドラの世界にいるとは思えない、素晴らしい演技力だ。翼竜やヘリコプターは特製のセットになっていて、場面に合わせて動かせるようになっていている。振動や傾きなど、機械ではなく、人の手で動かしていたことに驚いた。手作業によって、より細やかな表現ができるのだと感じた。

アバターは5作目までの公開を予定していて、順調に制作が進んでいるようだ。3Dメガネをかけずに、立体映像が見られる技術で最終目標にしているという。新たなアバターの世界が今から待ち遠しい。

『猿の惑星：新世紀』（2014年）

人間の薬物実験の副作用によって生まれた、知力に長けたエイブ。人間の一方的な都合で酷い扱いを受けていたエイブたちは、人間の世界から自由になるため、一致団結し運命を変えた。この作品はその10年後となる続編。

続編とは知らずに、2作目を先

著者の近況＝友人と「カップヌードルミュージアム」へ行き、マイカップヌードルを作りました。カップには空欄部分が設けられ、絵や文字などを自由に書くことができます。麺をセットしたり、具材を選んだり、ひとつひとつの工程にとってもわくわくしました。小さな子供から、外国の方まで、思い思いのマイカップヌードルに、なんだか温かい気持ちになりました。（中田）

に観てしまったが、エイブであるシーザー達の躍動感や、繊細な表情に一気に引き込まれた。冒頭シーン、顔や体にウオーペイントを施したシーザー（アンディ・サーキス）の目元がアップで映される目に宿るシーザーの力強い意志に、これから何が起ころのだろうとドキドキした。シーザーのモデルとなっているチンパンジーに元々白目はない。白目があると、弱肉強食の世界では逃げようとする方向がばれてしまい、生命の危機に陥ってしまうからだ。葉によつて進化を遂げたシーザーたちは、アイコンタクトや独自の手話で、コミュニケーションを取ることができ。人間のような白目を作ること、目に宿る感情を表現し、言葉がなくても感じ取ることができ。言葉話せるエイブが何頭かいいるが、多くは語らず、仕草、表情で魅せる。人間の要素を取り入れつつ、エイブに重きを置くという絶妙なバランスが素晴らしい。

モーションキャプチャの撮影では、特製スーツの他に義腕となる特別な棒を腕に装着する。四足歩行のとき、体の比率がエイブと同じになるよう設計されている。役者たちは6週間をかけ、基本姿勢

から、二足歩行、三足歩行、四足歩行と、特徴的な動作や鳴き声を練習していた。四足走行する役者たちの演技は圧巻で、人間の姿にもかかわらず、そこに映っていたのは紛れもなくチンパンジーであった。チンパンジー、ゴリラ、オランウータンなど、エイブを演じる役者たちが、それぞれの動きを熟知している姿に感銘を受けた。

シーザーを演じるサーキスもとても魅力的だったが、敵対するコバ役のトビー・ケベルも素晴らしい演技を披露した。チンパンジーという基本動作の会得だけでなく、人間に酷い扱いをされた過去を持つキャラクターとして、心に秘めた憎しみを見事に表現していた。シーザーと正反対の考えを持つコバが、この作品をより魅力的なものにしている。モーションキャプチャの撮影は驚くことばかりで、映画本編後にぜひ観てもらいたい映像である。続編がこの夏公開となるが、こちらも観るのが待ち遠しい作品だ。様々な映画やアニメ、ゲームを通して感じたのは、大好きな作品は、そのキャラクターの動きも魅力的だったということ。思わず真似したくなるような動きであったり、とうてい真似できない、かつ

こい動きであったり。ブルース・リーの鼻をこする仕草は、アニメやゲームなど、様々な作品にオマージュとして出てきた。動きひとつで、そのキャラクターを連想できるというのは、素晴らしいことだ。

表情や仕草というのは、その人が生きてきた時間、人生を表すもの。歩き方ひとつで、キャラクターを表現できるモーションキャプチャの世界。これからさらなる進化を遂げた作品に出会える、そんな期待を胸に新たな作品を楽しみにしている。

最後にこぼれ話をひとつ。2014年にマイブリッジの撮影技術と最新の技術を組み合わせ、オマージュ作品が作られた。マイブリッジの疾走する馬の写真を3Dプリンターで出力し、立体となった12頭の馬を高速で回転させ、ストロボスコープを用いてコマ送りのように見せる。すると、写真だった馬が、目の前で走っているように見えるのだ。温故知新のような作品に、さらなる表現の可能性を感じ、偉人たちが脈々とつなげてきた技術への敬意に胸が熱くなった。

●かつての撮影所の映画作りの実際、裏も率直に書いた本だ。とても面白いし、映画によせる思いに感動した。

(映画評論家・佐藤忠男)

●ちよつと異色の本である。ビュウな映画愛と趣が違ふ。『キネマ旬報』映画評論家・尾形俊朗

●映画界の盛衰、1作が完成するまでの映画人の苦闘、華やかな世界の内幕や裏話を軽妙な筆致で伝え、哀歓がにじみます。

●『プロデューサー』ならではの視点で綴る泣き笑いの奮闘を通して、巨匠から俊英まで監督、俳優たちの素顔が生きた歴史に埋もれた映画の裏話も興味深い。

（出版ニュース）

昭和映画屋渡世

坊っちゃんプロデューサー奮闘記



斎藤次男・著 四六判 256ページ
2200円（税別）

ごめ書房

〒270-0107
千葉県流山市西深井3-3-9-12
FAX 04-7115617
TEL 04-7115612

わたしのお気に入り 2

押切令子

がん患者の孤独を
コメディで描く **50/50**

フィフティ・フィフティ

がんという重いテーマを、ここまで楽しく仕立てるなんて…と思ったら、27歳にしてがんになってしまう主人公アダム・ラーナーのモデルは、50/50の脚本家ウィル・レイザーであり、アホ友カイルを演じるセス・ローゲンが、実際にウィルの親友でがんの時とともに過ごしている。だからコメディなのに心理描写は実にリアルだ。

がんになることでこれまでの日常に微妙な距離ができてしまったアダムの孤独感や、途方にくれながらも懸命に普通に接するカイルのやさしさを、50/50は表情で紡いでゆく。それはとてもやさしい。

抗がん剤仲間の死や文力果の表れない治療に、しだいに恐怖をつのらせてゆくアダムは、手術鬼いを吐き出す。すると自ら遠ざけていた母もその母が息子を手眼ざしは「なにが強く語る。セラピストを素直に受け止めるがんは、決してひとり悶える病気ではなかったのだ。

手術に向うアダムを見送るカイルの眼ざしは切ない。不覚にも、ここで涙



しっかりしなさい
あなたは絶対に帰ってくる!

ママ、本当は怖くて
たまらないんだ…

アルツハイマーの夫と
がんのひとり見子を
気丈に支える母
ダイアン



過保護でううとつらいと
思うだけ、母の
愛にどれだけ支えられ
ていたのかを知るアダム

教科書セラピーを卒業して
アダムの気持ちに寄り添う
セラピストのキャサリン



それで?



1月末、左胸の腫れに気付いて検査を受けた時も、がんではないだろうと思っていたお気楽な私。検査結果が次々と黒になり、がんと診断されるのをなぜかとても冷静に受け止めていた。自分のがんにならないという思い込みになんかの根拠もなかったことに気付き、日本人の二人に一人はがんになるという大ざっぱな統計が頭に浮かんだ。フィフティ・フィフティ。還暦を過ぎた私は子育てをどうに終え、やりたいことはかなりやつてきた。冷静でいられたのもそのおかげかな。でも若い人はそうではない。やりたいことも、やらなければならないことも限りなくある。だから検診を受けようね。早く見つけられれば。治すのに時間もお金も少なくて済むから。

筆者の近況＝90歳でがんを患う母が、麻薬系痛み止めのために突然の認知症に。その母を介護するがんの私…という、なんだか悲壮感が漂いますが、妹とふたりで「いずれ笑い話になるよね?」と言いながら奮闘中。(押切)

『パピヨン』 マックイーン、永遠に

岩館 範子

先日、映画『人生タクシー』（監督は、ジャファル・パナヒ）を観ていたら、登場人物の一人の男が携帯の着メロを『パピヨン』のテーマ曲にしていた。それで観たくなった。

それまでの『荒野の七人』や『大脱走』などのかっこいいマックイーン、ロマンティックなヒーローとはほど遠いヒーローを演じきったんだけど、顔中伸び切った無精ひげを生やしているような、ボロ服に身を包んでいるような、老いた姿だろうが、かっこいい。

元々このパピヨン役は、チャールズ・ブロンソンにオファーされ

たものだった。ブロンソンは当時人気絶頂で、アメリカ以外にイギリス、フランス、イタリア、スペイン、メキシコと世界を駆けまわった。そこで盟友のマックイーンが出演をOK。出演料は、当時最高ギャラと言われた200万ドル（約6億円）。共演者のダスティン・ホフマンは125万ドル（約3億7,500万円）。監督のフランクリン・J・シャフナーは75万ドル（約2億2,500万円）。総直接製作費1,300万ドル（約40億円）という巨大なプロジェクトだった。（1972）

胸に蝶の刺青があることから「パピヨン」（フランス語で「蝶」）と呼ばれた原作者アンリ・シャリエール。身に覚えのない殺人罪に問われた彼は終身重労働を宣告され、1931年に南米の仏領ギアナの刑務所へ送られた。不屈の闘志で7度の脱獄を決行。最後は、絶海の孤島と言われた悪魔島に収容されるものの、44年に8度目の脱獄に成功し、その後ベネズエラに逃れて市民権を得た。

独房内でゴキブリやムカデを食べるのサバイバル、ジャングルや荒海を越える命がけの逃避行。そ

んな想像を絶する13年間にも及ぶ地獄の日々を記したシャリエールの実録小説『パピヨン』は69年に発売される。たちまち全世界で1,000万部を超える大ベストセラーとなり、フランス・アメリカ合作で映画化されることになった。脚本はドルトン・トランボ。人間ドラマとしての厚みを持たせるため、パピヨンと対照的なキャラクターとして実話にはない人物「ルイ・ドガ」を創作した。監督のシャフナーはリアリズムを強調する人だった。すでに『猿の惑星』（68）、『バットン大戦車軍団』（70）、『ニコライとアレクサンドラ』（71）でヒットメーカーとして知られていた。俳優にとつてシャフナーとコラボすることは難しいことだった。マックイーン本人はやる気満々だったかどうかかわからないが、公開され観たことのない姿に観客はくぎづけだったらしい。（74年147日間という新記録の上映期間でベスト3になった）

72年のおわり、マックイーンはこの映画にキヤスティングされた。この年のマックイーンは・・・アリ・マッグローとサム・ペキンパー監督の『ゲッタウェイ』で

共演。2人は「いい仲」になっていた。パラマウント映画の副社長ロバート・エヴァンスと結婚していたマッグローとだからマスコミはマックイーンの火遊びと報道していて、ふたりとも元さやに戻ると言われていた。

73年は、1月から2月、日本のホンダ・オートバイのCM打ち合わせと撮影をして、3月18日『パピヨン』の撮影がスタート。フランス、スペイン、カリブ海のジャマイカ島などで撮影。

6月7日、アリとロバート・エヴァンスは正式離婚。7月13日ワイオミング州シャイアンでマックイーンとアリは結婚式をあげた。式には牧師、マックイーンのふたりの子供テリーとチャドウィック、アリの子供ジョシュアの6名のみという地味な出席者だった。

7月20日、マックイーンの盟友でカラテの師範だったブルース・リーが香港で亡くなった。リーと友人関係にあったジェームズ・コバーンとシアトルのリーの葬儀に出席した。

テレンス・ステイブレン・マックイーン、キング・オブ・クールと呼ばれたマックイーンは1980年11月7日午前3時50分ガンの



スティーブ・マックイーンとダスティン・ホフマン（右端）

ため死去。享年50歳。早すぎる。もつと、もう少し長く映画界にいてくれたらいろんなマックイーンを観られたのに・・・

彼が出演する予定だった作品は、『拳銃無宿』の映画版、『明日に向かって撃て!』、『クレムリンレター』、『モンテ・ウオルシュ』、『ラストムービー』、『華麗なるギャツビー』、『天国の門』(ヒットしたかな)、『弾丸を噛め』、『地獄の黙示録』(全く違う作品になったね)、『遠すぎた橋』、『ナザレのイエス』、『レイズ・ザ・タイタニック』、『スパーマン』(どんなスパーマン

になったかな)、『タイ・パン』など。もし実現したらまた違うマックイーンを観られて楽しかっただろう。実現してほしかった。

自分は、『大脱走』、『荒野の七人』、『タワリング・インフェルノ』、『ブリット』、『パピヨン』の順番で観たと思う。『ブリット』でセリフがあまりなく、存在しているだけでかっこいい、すごい、そんな人がいるなんてと思った。今は『栄光のル・マン』が観たい。『戦う翼』(62)、『ネバダ・スミス』(66)も観ている。『パピヨン』のラストのような、70歳、80

歳のマックイーンを観たかった。マックイーンの死因は肺ガンと言われているが、心停止。亡くなる1年ほど前に、モデルをしていた23歳年下のバーバラ・ミンティさんと結婚。彼女の勧めでロサンゼルス病院で検査を受けたら、アスベストが原因の牛皮腫と診断された。この病気は、進行が早く治す薬も治療法もない。亡くなる5日前の会話を録音したテープでは『心はくじけていない。何としても病気に打ち勝ってみせる』と言っていた。アメリカではもう助からないと言われ、手術を受けるためにメキシコに向か

った。手術は困難を極めたが、腫瘍の摘出に成功。しかし手術から17時間後の夜明け前、容態が急変。心臓が手術に耐えられなかった。録音テープには『もう一度生き直したい。そして他の人々の人生も変えることができればと思う。私に何が起きたかを皆に話していきたいのだ』とも残されている。

マックイーンの伝記を出版したマーシャル・デルルさんによると、病気の原因は海兵隊時代。船の機関室などに耐熱用のアスベストが至るところに使われていた。あと車やバイクが好きでレースによくでていたマックイーンは、身に着けたマスクや耐火服に使われていたアスベストが原因ではないかと言っている。

おまけ話として、マックイーンが出演した映画のチラシはとても人気が高く、1枚数十万円の値がつくものもある(初版)。コレクターの間ではイーストウッドとともに今でも人気を誇る。マックイーンとイーストウッドは同い年である。

◇

マックイーンの出演作品

53 Girl on the

Run

56	傷だらけの栄光
58	ニューヨークの顔役
58	マックイーンの絶対の危機
59	戦雲
59	セントルイス銀行強盗
60	荒野の七人
61	ガールハント
62	突撃隊
62	戦う翼
63	マンハッタン物語
63	雨の中の兵隊
63	大脱走
65	ハイウェイ
65	シンシナティ・キッド
66	ネバダ・スミス
66	砲艦サンパブロ
68	華麗なる賭け
68	ブリット
69	華麗なる週末
71	栄光のライダー
71	栄光のル・マン
72	ゲッタウェイ
72	ジュニア・ボナー/華麗なる挑戦
73	パピヨン
74	タワリング・インフェルノ
78	民衆の敵
80	トム・ホーン
80	ハンター

筆者の近況=最近SF映画が多いような気がします(気のせい?)。ファンには嬉しい限りです。秋には『エイリアン: コヴェナント』、『ブレードランナー 2049』が公開されます。楽しみにしています。が、近くに映画館のないド田舎に引っ込むことになり、どれだけ映画館へ行けるのかわかりません。映画は映画館で観るべきなのに。おまけにレンタルできるところもない。がんばって1本でも多くスクリーンで映画を観たいと思います。(岩館)

—読者から—

〈第4回〉

警備員室やや異常

農律 捨丸

関田監督、お変わりなくお過ごしのことと思います。ま、待って！早く作品を撮れたの、私に役をよこせだの申しませんから、いきなり没にはしないで、少しでもこの手紙に目を通してください。

〈報告 一〉私が、自宅ちかくの県立公園の夜間巡回警備員であることは、何べんも申し上げているとおりです。しかも、それは自分が会社ぐらしを中退した後に、たまに息子の思いつきから得た働き口であることもお話ししました。いわば、ひょうたんから駒のようなことで、理想的な職住近接、世の

中のお役に立てて、少しは報酬を得、しかもヘトヘトになれるので余計なことをしないようになったわけですが、今回は、その上番風景から。この冬前後は、午後三時になるとTVの復刻版放送「鬼平科帳」を見て仕事に出るのがつねでした。「鬼平」は昔から人気があったようですが、私はこの年になるまでまったく無縁に生きて、池波正太郎の存在くらいしか知りません。それが、警備の仕事に就いてみると、このドラマの味わいがいい。松本幸四郎（もちろん、亡くなった先代）の味にすっかり魅せられてしまいました。その子たち、現世の幸四郎や中村吉右衛門の活躍ぶりも見上げたものではないですが、先代は文句なしにいい。花があるし、何よりも役者の愛嬌がある。映画としてつくられている作品だから、監督たちも手を抜かず競作してついでに味がある。私など、手もなくそのとりこになりました。その後、代々鬼平役は代わりますが、どうしても時代が下ると品下る印象です。見る者のこころの高揚と喜びをもたらすのは演劇の精髓であるはずだ、それを欠いては役者など……と、また十代の気分に戻るのです。監督、

人は人の力によってしか奮い起こされない何ものかを持っていますよね。なぜこんなにすごい仕事（映画づくり）を放っておくのですか、早く作品を！（ではありませんでした。）そんな鬼平世界を少しばかり仮想するのが、仮眠中の警備員室です。わずかに四時間半ですが、真夜中はわれわれも寝るところが、明け方ともなると、ひどい雷鳴が起こることがあります。相棒警備員のいびきです。自分もさておき、すぐとなりのやつのは我慢ならないもの。仕事中は無口で、公園のやつかい者である近くの中学生軍団にさえ、ろくに注意を与えないやつがいます。あまり口が重いので、中学生たちにも「話せないやつ」などと言われているほど。そのやつが、大いびきという内ゲバ向きの武器を持っているのでした。これにはほとんど閉口。ある晩、ふと考えて、やつの呼吸に合わせて、吸気るときに同等の声を出してみました。すると、三、四回もするうちに、やつがいびきを止めるではありませんか。こちらのニセいびきの音をしっかりと聞いています。まるで、リーダー波のエコーを見ているかのように。起きているのかと思え

ば寝ているし、寝ているかと思えばあたりの様子を探っている。いびきも安全確保の術のうちかと、すっかり恐れ入る次第ですが、そんな効果も一過性ですから、目覚まし時計に起こされるまで、何回かこれを繰り返すことになります。そのため、やつとの当番の夜はきまつて寝不足。しかもこのリーダーさん、相棒に朝の挨拶をしないのです。寝足りなげに、ムスツと起きてくる。いつの間にやら、こちらにも挨拶をしなくなりました。鬼平の時代の小伝馬町の牢屋ならきつと恐ろしい仕置がなされているだろうにと、腹の中で暗くニンマリするのは私だけではないと思いますよ。

うまいよとひと声返す中学生
巡回中のわれおせっかいの夕

〈報告 二〉ランナーたちのことも聞いてください。立派な公園（K県の県立公園第一号）ですから、早朝、昼間、夕方から深夜まで、いろいろなランナーたちが走っています。私は、走りこしません。この公園を六十年ちかくも利用してきた近隣住民であり、愛着も持って巡回に当たっているつもりです。なんせ「鬼平」です。それ

でけしからんのはマナーの悪いランナーたち。道のコースどりも、挨拶も、ツバ吐き禁止もない。健康志向というのは、自分の体外的ことは一切頭がないのではないか。こちらがおせっかいなオッサンであることを知らずか、まるで公共の空間も何もあったものではない走り方が多いのです。うしろから警備員にぶつかって来て、どなり散らして行くなど、マナーも最低です。もちろん大多數のランナーたちは、マナーよく走っているはずですが、サングラス着用者にこの傾向が強いのはどうしてか。なまじ、地域を知っていると思ひ込んでいるオッサン、嘆くだけではすまない気がするのです。

心電図とらずともいいその替り
コロッケ買って桜もち買う

〈報告 三〉公園で、男女の話が出てこないはずはありません。監督、あるんですよ、そういうのもこれも近接するS丘高校があります。ここの男女生徒は、私の青春の頃でも、公然とした(?)カッブルを多く見かけました(おすぎとピーコも卒業生)。テニスコートよこの更衣室に、多目的トイレがあります。これは、夜間はロック

して、朝にカギを開けるといふことになっていきます。それで初夏の頃、夕方ドアを閉めようとして、念のために中をチェック。びっくりしたのは、中に制服の男女がいるではないですか。着衣してくれてよかったが、ともかく、いる。こちらがあわてて帰りを促す恰好なでした。まるで、ペッパ警部です。よかったか悪かったか、ともかくそんなことしか出来ません。が、高校生の交際も大胆です。夕暮れには、けっこう同様なシーンが見られるのですが、いずれも公園のはずれのほうで起きるので

す。そして、これが成人版ともなると、冬の青空駐車場での♡行為すらあり。窓ついで見えない車内だって、警備員は怪しい要素を見落としていけませんから、LED光で照らすことになります。こちらがきまり悪くなったりしますよ。それに常連ともなると、きまつて時と場所を合わせ、自分たちの密着ぶりをわれわれに見せて、ご満足なさっているかのようなケースもあるのです。男女の「ご交際」でのトラブルは表立っての被害がないからよいでしょうか。また、将来の少子社会対応として大目に見るべきでしょうか。夜間に

はポケモン・ハンターたちが活躍している現状ですが、もつとこわい種族たちが現れるようになれば、われわれも拳銃くらい所持しなくては、とあらぬ方向へ思考は向くのでした。

〈報告 四〉

つまり歩いて歩いて回る警備員

明りの先も一羽のカラス

アカシアの木が数本並んでいる坂道があります。これも、幹まわりが片手でつかめるような細い時代から、現在の、太くてごつい太木になるまで、その成長を見つけてきた木たちです。その一本に、暗くなるとカラスが一羽止まるようになりました。同じ枝の同じところ。すぐ下の道を見れば、フンが白く点々としています。二、三カ月もすると、すっかりおなじみサンなのですが、アカシアの木いっぱいに花が咲く頃、ふといなくなりました。花もこれだけ多いと、アレルギーだつて起きるだろうなど考え、しばらくして忘れかけていた頃、今度はもう一羽を従えて現れました。まるで、ヨメさんをもたらした挨拶に来たようなのです。われわれが、いつもきまつた時間に、同じように懐中電灯の明りを

当てることを知っていたのか、律儀なものです。なかなかあなどれない関係とは、こういうことでしょうか。台湾リスが大暴れをしている園内の樹木にとつては、カラスの存在が必要でさえあるはず。君も園内の警備に当たってくれとばかり、妙に親近さを持つことになりました。

私の警備員ぐらしも、四年目になります。それで、この「投稿」にも毎回登場させている息子の近況を。(なにしろ、表カードと裏カードの関係なのでお許しを)今春、ある夕方のこと、また仕事を辞めてきました。会社を辞めるのは父親も得意技ですが、息子もこの四年間に三度です。父もさすがにウームというところ。これは覚悟の行動であることもわかります。現場仕事が一番下のほうでは、不満ならばこうするしかないように出来ているのですよ。非正規雇用の生き方のうち、というべきなのかも知れませんが。父も父として我慢ならんと考えたのが五十五歳のとき。それに比べればまだ時間を持つているぞ息子よ。というわけで、今号のお別れもわが家の風景です。持ち帰る仕事けとばしわが息子
玄関口に長靴ならぶ

世を憂え、映画に惑い 「トム・アット・ザ・ファーム」

堀江 広子

この国の政治の、今

映画評の前に書いておかねばと思うことあり。

二年前に私は、本誌に安倍政権の改憲に向けてのゴリ押しに素朴な疑問を投げかけたのだが、さらに様々な事案で不安が募ってきた。二〇二〇年の東京オリンピックの年に合わせて改正（改悪ではないか）した憲法を施行する年にしたいなどと宣言した。北朝鮮が、日本に向けて弾道ミサイルを発射するのではないかと不安を抱いて毎日を通して国民に向けて、自衛隊の軍隊としての位置づけを

強行するかのような宣言である。隣の韓国じゃ、女性大統領朴槿恵が在職中に汚職で罷免され逮捕となった。今や、映画や冗談でもなく地球上の国々のそれぞれのトップが危うい思考の方々に思えて、大丈夫か？と地方で暮らす高齢の女が僭越ながら心配し、神経質になる時代に入っているのだ。

北の金正恩総書記は、ミサイルをポンポン飛ばしている。戦争は、最前線の緊張状態の中でちよつとした不手際や誤解や偶然から勃発することも多いとか。筆者は戦後生まれの戦争知らず、戦争を体験せず生涯を終われるかと有り難い気持ちだったが何だか怪しくなってきたし、次世代の人々が苦しむことになりはしないかと気がもめるご時世だ。

アメリカ人はトランプ氏に多くの票を投じたのだし、日本では自民党一強時代になったのも、国民が多くくの自民党議員を地方から国会に送り出したからである。結果はどうだ。安倍首相や首相の提灯持ちのような官房長官は、真実をねじ曲げることなど朝飯前だとかばかりにごまかしを堂々と言っているではないか。元文科省事務次官をはしたなくも週刊誌的な

人格攻撃し、安倍首相とおそらく同じ穴のムジナだったであろう幼稚園の理事長を冷酷に変人扱いをしたり、モラル・ハザードが止まらない。森友学園や加計学園問題の巧妙な論点ずらしなどいくら頭の悪い私だって分かるぜと言いたい。官僚主導から政府主導の政治へとの掛け声は勇ましかったけど、結局権力の濫用をしたかったのねと思わざるをえない。国会で与党議員が圧倒的多数を誇っている間に、なりふり構わず安倍首相は特定秘密保護法、安保、憲法改悪（改正と政府は言っているが）、共謀罪を成立させたかったのだろう。何れも国民を幸せにすることより、政府にとって都合の良い法制ばかりを優先しているような気がしてならない。

今号のシネマ気球が刊行される9月頃には、国会が一体どのような事態になっているのか。映画よりよほどドラマティックな展開で、全く退屈しない日々を送らせてもらい、ボケる暇などないのである。

グザヴィエ・ドラン監督の映画

そろそろ映画の話にしよう。その映画は本当に変わっていた。「トム・アット・ザ・ファーム」直訳

すると「農場でのトム」。ノンビリした雰囲気の映画なのかと思いきや、何やら異様な空気が漂っている。主演、監督、製作共にグザヴィエ・ドラン自身。

都会のモントリオールで広告代理店に勤める今どきの若者トムは、同僚で恋人のギョーム（男性）を突然事故で失い、ギョームの故郷で行われる葬儀に出席するのだが……。

都会と田舎の価値観の違いに戸惑いながら、ギョームの兄フランシス、母アガットが登場して彼らのそれぞれの苦悩に直面し、とヒューマンドラマなのかと思いついてると中盤からサイコサスペンスのような展開を見せ、アガットの激情に触れ驚いたり、フランシスの暴力的な性格におののきながらトムはなぜかその家から逃れられなくなる。

よく、平和な家庭に異質な他人が入り込み家族の絆が崩壊していくという映画はあるが、これは逆で、滞在している他人の家から訪問者が自らの意思で出られなくなるというパターンである。ホッとするのはトムが最後はモントリールに戻れることだ。だが以前のトムとは変貌しているかも知れない。

筆者の近況＝地縁血縁の濃い地方に住んでいて、自治会やお寺との付き合いに異を唱えず従順であるからで評価されます。主体的できちんとした意見を持つ人は暮らしていくかとも知れません。まして女が発言することは未だに煙たがられます。しかしながら中央の政治世界も同じようなものかなと感じる今日この頃です。（堀江）

いけれど・・・。

この映画は我々にさまざまなメッセージを発していると感じた。異性愛者が大多数のこの社会での同性愛者たちの思い、都会と田舎の暮らし方の違いによる人々の苦悩、親と子の価値観の違い。

カナダ映画であるが、日本の都会と地方の日々置かれている状況や息苦しさで悩む人々の姿と少しも違わないことに驚く。

若千二十八歳の監督グザヴィエ・ドランは、何と十九歳で俳優、監督、脚本、製作を手がけた「マイ・マザー」という映画でデビュー

音楽で何ができる？

鶴岡 佳恵

映画の音楽がとても好きです。最近観た映画でとても印象に残っているのは、昨年夏に公開された「君の名は。」。

作品中の音楽をRADWIMPSが作っていますが、映画の世界観と独創的な歌詞がとても素晴らしいです。私も楽器屋さんで「君の名は。」の楽譜を見つけてすぐに買い、たどたどしく弾いてみましたが、「この和音からこの和音に行くなんてよく考えたな!!」と

ーし、天才と評された。残念ながらこの映画はまだ観れていない。「トム・アット・ザ・ファーム」

の翌年に撮ったのが「マミー」である。発達障害のある十代の息子と母親の物語で、何とも切ない映画だった。監督は母と子の関係を独特の切り口で捉えて表現する。それは、観る側に様々な既成概念や常識的な考え方を少しも入れさせず非情とも思える描き方なのだ。そういった映画は他にもあるにはあるが、彼の映画を観ると自分の中には存在していなかったような感情や感慨が芽生えてくるのだ。

音を鳴らすたびに感動しました。もう一つの映画は今年1月末に公開された「キセキーあの日のソビト」です。

この映画は音楽グループGreene Nの結成物語です。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、Greene Nというグループは音楽グループではありますが顔を一切公開せずに活動しています。

その理由は、グループ全員が歯医者さんだからです。(詳しいことはぜひ映画を観てみて下さいね。)Greene Nが作る音楽はとても温かく、元氣や勇気をもらえる、迷っている時に背中を押してくれる、そんな歌だと私は感じます。

それこそが彼の映画の特徴なのか。新しい概念というのか新たな思想とも思えるものが我が頭に棲みついてくるようだ。

拒絶感もあるが、馴れ感も同時に湧いてきて、彼の映画は今後も時々観たくなる映画という位置付けとなった。それは監督が何とも甘美で憂いを含む風貌であることも多分にある。つまり、とても魅力的な人なのだ。

世界中にはいろいろな映画監督がいるけれど、外見に惹かれた映画人はめったにいないとしみじみ感じた次第である。

彼の映画には終わりがみえない。結論が出ない。ストンと附に落ちた感もない。宙ぶらりんにされた観客は、自分の考えに自信を持てなくなってしまう。人間についてまだまだ理解が足りない、知らなさすぎるなあと自己の未熟感に打ちのめされる。二十八歳の青年の映画にだ。これから先、どのような映画を撮ってこの高齢者を悩ませてくれるのかとても楽しみである。

◇ ◇ ◇

役に立つのか、などが頭の中で何度も巡りました。時間が経つと、復興支援で歌が世間に流れたり、被災地で演奏会が開かれるようになりました。演奏会に聴きに來た人たちが涙を流しながら演奏を聴いているのをテレビで見た時、音楽の力を知った気がしました。確かに音楽には病気を治したり、食欲を満たす力はありませんが、医療ではできない、心に届く何かがあるのだと知りました。

この映画を観終わった後には、自分の好きな歌が聴きたくなる映画だと思えます。

筆者の近況Ⅱ先日、映画「バイレイツ・オブ・カリビアン」最後の海賊」を観てきました。主人公のキャプテン・ジャック・スパロウのテーマ曲「彼こそが海賊」はいつ聴いてもわくわくする、聴いても演奏をしていても大好きな曲です。今回の映画もとても面白おかしく、感動的なストーリーでした。(鶴岡)

アニメ版と実写版、 ここが違う

関口 健一

◎人間臭い実写版

ある日、WOWOWで実写版「科学忍者隊ガッチャマン」を見た。「科学忍者隊ガッチャマン」は1972年10月～1974年9月にフジテレビで放送されていたアニメだ。当時、わたくしは小学三年生。毎週日曜日の夕方になると、ガッチャマンを夢中になって見ていた。子供の頃、夢中になって見ていたガッチャマンの実写版を見る前から楽しみにしていた。しかし、わたくしの目にはアニメと実写版はかなり違った物に映った。実写版で演じている男優も女

優も生身の人間だから多少人間臭くなるのは仕方がないことだと思うが、ガッチャマンってこんなに人間臭い物語だったつけないかな

実写版ガッチャマンを見終えた後に調べたことだが、実写版のガッチャマンはアニメのガッチャマンをベースにしたオリジナルストーリーになっているそうだ。わたくしが映画を見る時は、下調べをしないで見る人が多い。それは、まっさらな気持ちで映画を楽しみたいからだ。もちろん予告編やテレビでやる映画案内は見るが、それ以外の下調べはしない。だから、実写版ガッチャマンを見た時、ストーリーに違和感を感じたんだと思う。実写版ガッチャマンに違和感を感じたのは、ストーリーだけではなく、悪の首領のベルク力ツエが美し過ぎると思った。ベルク力ツエは、老若男女自由自在にいつでも変身ができるのが、ベルク力ツエだ。そして怒り出すと、左右半分ずつ男と女の身体になる。実写版の「科学忍者隊ガッチャマン」のベルク力ツエは、初音映莉子が演じている。ベルク力ツエにしては、初音映

莉子は美し過ぎると思った。キャスティングミスだと思った。わたくしなら、はるな愛かミッツマン・グローブをベルク力ツエにキャスティングすると思う。実写版「ガッチャマン」を見て、残念に思ったのだ。

原作がアニメで実写映画になって残念に思った作品は、ほかにもある。「進撃の巨人」や「映画ひみつのアッコちゃん」がそうだ。

「進撃の巨人」は冒頭の人間が巨人に襲われるシーンが、リアルで怖い。気の弱い子供は、泣いてしまっただろう。実写版の「進撃の巨人」は、PG12が付いている。とはいえ、原作は漫画。実写版の「進撃の巨人」を楽しみにしていた子供もいただろう。リアルであることは怖いことだと思うが、一工夫して欲しかった。

「映画ひみつのアッコちゃん」もオリジナルストーリーだ。大人になってOLのアッコちゃんを綾瀬はるかが演じている。アッコちゃんの上司役で、谷原章介。アッコちゃんの会社の社長役で、大杉漣が演じている。この映画の中で、アッコちゃんがコンパクトを使つて、上司や社長に変身するシーンがある。姿かたちは谷原章介や大

杉漣だが、セリフはアッコちゃんのまま。谷原章介も大杉漣もアッコちゃん、つまり女の子の言葉でセリフを言っている。そのシーンは、谷原章介も大杉漣もオカマっぽくて面白い。オカマっぽい谷原章介や大杉漣を見られたのは、後にも先にも「ひみつのアッコちゃん」のあのシーンだけではないだろうか？ そういう意味では貴重な映画だが、原作からかけ離れているのは残念だ。

◎ジブリとディズニ

アニメーション映画で欠かすことができない、二大ブランドがある。日本のジブリ映画とアメリカのディズニ映画だ。ジブリ映画は、楽しい作品も悲しい作品も人間の絆を描いている物が多い。作品によっては親子だったり、兄弟だったり、友達同士だったり、ご近所さんだったり、いろいろなシチュエーションで様々な人間の絆を描いている。

ディズニ映画はどの作品も、人間の良い部分と悪い部分がちゃんと描かれている。パターン化しているといえそうだが、ぶれないディズニ映画の凄さだと思う。そして、原作アニメが実写化され

でも、けして人間臭いものにはなっていない。ディズニースタンドのコンセプトは「夢と魔法の王国」だ。夢や魔法に、人間臭さは余計なもの。とはいえ、どの作品も人間の強さや弱さがちゃんと描かれている。ワンパターンなストーリー展開のように思うけど、人間誰しもが持っている部分だ。それに關しては、実写映画でも変わらない。

ジブリアニメで実写映画になった作品といえば、「魔女の宅急便」だ。魔法使いの女の子が、魔法のほうきを使って宅急便をやる物語。小芝風花や宮沢りえが出演していた映画だ。実写版「魔女の宅急便」は合成映像を使って、映画の世界観を表現している。特に、キキがほうきを使って空を飛ぶシーンは

夢にあふれている。ジブリの世界観を表している。

逆にアニメであっても、人間臭さを描いている作品がジブリアニメにはある。1988年公開「火垂るの墓」がそう。人間臭いとはいえ、「科学忍者隊ガッチャマン」や「ひみつのアッコちゃん」ほどではない。漫画っぽい絵が、そうさせているのだろうか？ 戦争の悲惨さを描いた「火垂るの墓」は人間臭くは描かれない。戦争の悲惨さを描いた「火垂るの墓」でさえジブリ映画特有のほのぼの感がある。

◎ルパン三世とあしたのジョー

アニメが実写映画になって良かったと思う作品もある。「ルパン三世」や2011年に山下智久主演

で公開された「あしたのジョー」が良かったと思う。「ルパン三世」は映画の冒頭ではわたくしは気づかなかつたが、中盤ぐらいいで初期のマンガを実写化した作品だと気づいた。キャストは、ルパン役に小栗旬。次元大介役に玉山鉄二。石川五右衛門役に綾野剛。峰不二子役に黒木メイサ。銭形警部役に浅野忠信だ。峰不二子役が黒木メイサだということがちよつと残念だが、全体的にキャストが役づくりに力を入れていた。わたくしとしては、峰不二子役を増田有華にやつてもらいたかつたです。ファンの願望ですね。ルパンの愛車「フイアット500」もアニメのまんまで良かつたと思いました。

「あしたのジョー」は、ひなびた1960年代後半の雰囲気を感じ

させている。「あしたのジョー」の時代設定が1960年代後半だから、原作を忠実に描いていることになる。わたくしは「あしたのジョー」をWOWOWで見ているら、部屋に来た弁護士さんに「ずいぶん古い映画を見ているんだね！」と言われたぐらい、映像が古っぽく描かれているのだ。また小道具も、1960年代後半の物を揃えている。そしてキャストが、原作マンガのキャラクターになりきっている。特に、力石徹役の伊勢谷友介と丹下段平役の香川照之が良い味を出している。原作マンガに基づいて、時代背景やキャラクターにこだわつたとても良い映画になっている。

明らかに。ケニーはFBIの追及を受けるが、ケニーも被害者、罪を問われない。マイケルはいかさまの代償を負うことになる。ケニーは一文無しになって、妻の元に帰る。ラストは思わぬほどでん返しが待っている。マシュー・マコノヒーが山師の起伏が激しい感情、億万長者になったり絶望のどん底につきおとされたり、をうまく表現している。

●金鉱を巡る攻防●
「ゴールド―金塊の行方―」
(監督＝ステイヴン・ギャガ
ン)
破産寸前の炭鉱採掘業者ケニー・ウェルス(マシュー・マコノヒー)と落ち目の地質学者マイケル・アコスタ(エドガー・ラミレス)が手を組んで――「みんなを見返そう。儲けは山分けだ」との粗末

な契約書を交わして――インドネシアのジャングルで金鉱を探り当てようとする。なかなか金脈が発見できず、長雨も続き地元の働き手たちも現場から離れていく。ケニーはマリアにかかつて生死の境をさまよう。マイケルによる地元民の説得が奏功して、作業が続けられることになる。金脈が発見されると大手デベロッパー(ブルース・グリーンウッド)が乗り出してくる。デベロッパーは、イン

ドネシア大統領と旧知の仲であることを利用して、軍隊の力を借りて掘削現場を横取りしてしまう。二人はそれに対抗して大統領の息子を引き込んで不利な取引条件を得る――それでも莫大な利益を得られる――金鉱を取り戻す。ケニーは業績が認められ、その年の業界の栄誉賞を受賞するのだが、いつの間にかマイケルは金鉱の株を売却、大儲けしてトンずらしてしまう。金鉱は詐欺だつたことが

(流漂介)

カメラマン・木村大作

片桐 公男

2016年12月29日(水) 21時05分から1時間45分、NHKラジオ第一で「カメラマン木村大作が語る映画の世界」を聞いた。

『駅 STATION』(降旗康男監督、主演・高倉健、倍賞千恵子)。国鉄函館本線銭函駅が撮影の舞台となった。

「事前にロケハンに適した場所を探した」

映画は路線を走る列車でぶっつけ本番で撮影した。

「石田あゆみが健さんに敬礼する場面は、そうした中で生まれたものだった。俳優の気持ちに乗っていると、カメラマンが撮る。」

映画を観に来る客は、役は何でもいい、健さんを観に来るんだよねあ」

雪山を背景に赤い電気機関車に牽引された列車が銭函駅ホームに入ってくる。石田あゆみが乗り込み列車デッキから高倉健演じる三上刑事に敬礼する場面は、確かに絵になっていた。木村が言うように、事前に周到に準備をしてこの駅を選んだことが理解できる。留萌線ではディーゼル車なので発車前に扉が閉まってしまうため、名場面が撮れないのだ。

『八甲田山』。明治35年の陸軍弘前第31連隊の八甲田山雪中行軍を新田次郎が小説化、それを映画化するために森谷司郎監督の下、十和田湖周辺で撮影が開始された。

「人は大切なことと出会えば幸せ。黒澤明監督と出会わなければ今はない」という木村はこう言った。

「俺にとつて映画の恩人は『八甲田山』だ。この映画に人生を賭けた」

この映画を撮るために雪上車を一台用意した。しかし、健さんは乗らず、他の俳優と3時間ぐらい歩いた。あるとき健さんが、つかつかと木村のところへ歩いてきて聞いた。

「何を待機しているのですか」

木村は答えた。

「今は見えないが、山が見えてくる。それを待っている」

夕方になって雲に隠れていた山が見えてきた。それとすぐカメラを回して撮った。まだ若かったので突っ張っていたのだ。

ある日、冷たい風が吹き体感温度マイナス35度ぐらいの寒い日、5百メートルほど先から歩いてくるシーンだった。前田吟が「俺は馬や牛ではねーぞ」と叫んでいた。つるつる凍ったところを歩く場面だった。そんななか、役者が誰も動かなくなり座り込んでしまった。

「俺も困ってしまった、突然目の前の十和田湖へじゃぶじゃぶ胸まで入っていった。森谷監督も俺に続いて入ってきて『すいません。俳優さんも入ってください』とどなった。そんなとき、健さんが『あいつの言うことだけは聞こう』と他の俳優を説得してくれた。これが『十和田湖事件』といわれている神話です」

あの一件で、

「夢を見ているような映像が撮れている」

という満足感があった。映画づくにはあるきっかけがある。

軍する場面がたびたび登場するが、演じる俳優も重労働だろうが、カメラを回す方みたいへんだろうなあと、木村が言う「人生を賭けた」という言葉が画面から伝わってきた。

67歳にしてはじめて『剣岳 点の記』を監督する。なぜ監督に挑んだのか？

「カメラマンは監督をくどかなければいけない。自分が監督になればその必要がない。二役をやっている方が精神的に楽だから」

木村はこの映画を作るにあたって決意した。

「この映画ができたら映画におさばしよう。ワンカットから最後まで力の限りを尽くしてやろう」

映画づくりは金のことばかり。

「ヒットづくりにも金がかかるが、山はセツトがいらない。本物の山へ行けばいい。大変だけど」

周囲からは「こんなの絶対に映画にはならない」と言われた。木村も「絶対人は来ないと思ったよ」と言う。撮影には高山という過酷な現場と向き合わねばならなかった。

「池の平まで9時間かけて行くと言ったら皆に止められた。測量隊は明治40年、わらじと足袋だぞ、

俺たちは明治の男に負けるのかと言ってでかけた。山小屋はいっぱいだったので、仕方なくテントで寝た」

「困難にぶつかると役者もスタッフも変わる。苦労を厭わなくなる。自分は苦難にぶつかると『八甲田山』を思い出す。役者には明治時代の測量隊と同じコースを歩かせた」

木村はこの映画で、日本アカデミー賞監督賞、キメラマン賞を受賞する。

「自然には美しさ、厳しさ、悲しさがある。それは人間と同じで、のんびり生きてきた人と、厳しい人生を生きてきた人とは違う」

私の趣味の一つに登山がある。若いときは35キロのザックを背負い、穂高や剣岳に登った。木村が言うように、山には美しさがあると同時に厳しさが同居する。いったん荒れた山々は人間には手が付けられない。「人間社会と同じ」という木村に大いに共感できるし、彼の映画にかける情熱にエールを贈りたい。

2017年5月公開の『追憶』で降旗康男監督と久しぶりに組む。

クラシック映画 お薦め10本

森田 洋一

「Gメン」(1935)

1930年代ジェームズ・キャグニー主演の犯罪映画です。「犯罪王リコ」でエドワード・G・ロビンソン、そして、「民衆の敵」でジェームズ・キャグニーが脚光を浴びています。本作品では、正義の方を演じています。ラスト近くの銃撃戦は迫力あります。ジェームズ・スチュワートの「連邦警察」のオリジナルの思いました。「白熱」「汚れた顔の天使」でキャグニーが好きになりました。

「いちごブロード」(1941)

本作品は、「或る日曜日の午後」

のリメイクです。ジェームズ・キャグニーが、うだつのあがらない歯医者を演じています。オリジナル音楽が楽しい感じ。恋人役に、オリビア・デ・ハビランド、脇役でリタ・ヘイワースと、女性演技陣もいいです。オリビア・デ・ハビランド、「風と共に去りぬ」の女優でジョン・フォンテインの姉にあたります。エロール・フリンとの共演が初期多かったです。「暗い鏡」では双子の役を見事に演じた名女優。「女相続人」でもオスカーにふさわしい演技していました。

「街角の桃色の店」(1940)

純粋な恋愛映画には、ジェームズ・スチュワートが合っているとします。「素晴らしき哉、人生！」「我が家の楽園」「スミス都へ行く」が、代表作と想っています。本作品、文通相手に会うワクワク感が素直に伝わってくる感じがしました。エルンスト・ルビッチ監督ですので、ユーモラスな人間模様が楽しめると思います。「青髭八人目の妻」「極楽特急」「生活の設計」「ニノチカ」など同じ時期に見ました。本作品がお薦めです。「ユー・ガット・メー」のオリジナル作品です。

「死刑執行人もまた死す」(1943)

「メトロポリス」「ドクトル・マブゼ」のフリッツ・ラング監督作品です。反ナチスを描いた内容で、ものすごく物語の構成がしっかりしていると思います。作品としての完成度も高いと感じます。主演が、キャロル・ロンバート。クラーク・ゲーブルと結婚、残念ながら飛行機事故で亡くなってしまいました。フリッツ・ラングがアメリカで撮った作品では、「暗黒街の弾痕」「真人間」「激怒」、いずれも、シルビア・シドニー(ヒッチコックの「サボターージュ」に出ている女優)主演で見応えあります。まずは、本作品を。

「最後の突撃」(1943)

「第三の男」のキャロル・リード監督、主演が、デビッド・ニーブン、内容は、戦場に行くまでの訓練、上司と部下の関係といったところを描いています。派手なシーンが出てこないものの、人間味あふれる演出で、一級品の仕上がりと感じました。

「凡てこの世も天国も」(1940)

この作品は、涙、涙といった感

じです。悪女的なイメージの強い
ベティ・デイビス、相手役がシャ
ルル・ボワイエです。学校の先生
として最初に、ベティ・デイビス
が登場。純粋な雰囲気が出ていま
した。「偽りの花園」「札つき女」
の悪女イメージが強く、周囲の男
性を困らせて、自分は平然とする
といった展開を本作品でも期待。
実際は、結構複雑な内面、たぶん
観た人は感動するだろうな、とい
った印象でした。

「風雲児アドヴァース」(1936)

元祖アクションといった感じ、
3時間近くの大作。はじまって1
時間以上、主人公が出てきません。
フレドリック・マーチ主演。「ダ
ク・エンゼル」「ジキル博士とハイ
ド氏」「スタア誕生」といった作品
「必死の逃亡者」でも、ハンフリー
・ボガードよりもいい演技してい
たと思います。

「穴」(1959)

ひたすら脱獄のために、穴を掘
り続ける。それだけの作品。だけ
ど、地道にコツコツやる、そこが
眼を引きます。「現金に手を出す
な」「モンパルナスの灯」のジャッ
ク・ベッケル監督。「勝負をつけ

る」のミシェル・コンスタンタン
が何となく印象に残っています。

「犯人は21番に住む」(1943)

推理作品、アンリ・ジョルジュ
・クルーゾー監督ではこの作品が
お薦め。「密告(ル・コルボー)」
「犯罪河岸」「恐怖の報酬」とい
った推理やサスペンス、情婦マン
のような人間模様どれも見応えあ
ると思います。推理の展開として
は本作品がお薦めです。

「スタンレー探検記」(1939)

スペンサー・トレシー主演。
「ブーム・タウン」「テスト・パイ
ロット」などでクラーク・ゲーブ
ルを引き立てる、「女性No.1」
「アダム氏とアダム」ではキャサ
リン・ヘップバーンとのコンビ、と
素晴らしい俳優。「我は海の子」
「少年の町」でオスカー受賞。アフ
リカ探検の様子が描かれ、演技拔
群、演出も素晴らしい。インディ
ー・ジョーンズに近い活劇として
は、本作品とケイリー・グラント
主演の「ガンガ・ディン」、ロナル
ド・コールマン主演の「失われた地
平線」あたりと感じました。

お薦め！泣ける映画と笑える映画

森田 洋一

●泣ける映画

「裏町」(1941)
原題「バック・ストリート」、ニ
ュアンス的には、裏街道の人生とい
った感じ。何回か映画化され、シャ
ルル・ボワイエのバージョンを観ま
した。結婚して家庭を持っても、一
人の女性を愛し続ける姿を描きます。
二十五年間の重みが前にわかるか
というセリフが印象的。

「ラスト・クリスマス」(1980)

余命いくばくもない子どもを取り
巻く作品。はじめて泣いた映画です。
主演がクリストファー・ジョージ、
「メイデイ4,0000フット」
「エクスタミネーター」の俳優さん。
「悲しみは空の彼方に」(1959)
ラナ・ターナー主演。「雨のラン
チプール」(「マダムX」のリメイ
ク)の女優さん。本作品も、「模倣の
人生」(クロード・コルベール主
演)のリメイク。黒人女性の娘の葛
藤を主軸とする展開。「母の旅路」
よりも、泣けました。

「ビッグ・フィッシュ」(2003)

ユアン・マクレガー(「スター・
ウォーズ エピソードI」,「天使と悪
魔」など)主演。嘘つきと言われた
父親、の物語。プロポーズした、
ラストの人生総決算、ここは泣けま
した。映画好きなアメリカ人もこの
作品は泣けるといつていたのを覚え
ています。

「マーガレットと素敵な何か」(2009)

シネスイッチ銀座で観ました。「ラ
・ブーム」のソフィー・マルソーが
主演。現実に生きる自分自身が、子
どもの頃自分にあてた手紙で、小さ
な頃の出来事から本当の自分を見つ
める、誰にでもあり得る展開。

●笑える映画

「吾輩はカモである」(1933)
マルクス兄弟の代表作品です。と
にかく大笑いしました。特に全然話
さない役の方の、しぐさがものすご
く笑えました。

「ぼくの伯父さん」(1958)

ジャック・タチのコメディです。
冒頭の社長が出かけるシーン、服装
が飼犬と同じ、ここから、もう笑
いが出てきました。特に派手なセリ
フなく、観ていると笑う、感じ。

「デンジャラス・ベティ」(2013)

新宿の劇場で観ました。限定で上
映、バンフレットも販売なし。主演が、
サンドラ・ブロック。なぜ全国上映し
ないのか不思議。女性刑事のコメデ
ィー。全編大笑いです。「デンジャ
ラス・ビューティー」よりも面白いです。
「大頭脳」(1968)

泥棒コメディです。デビッド・
ニブン主演。笑えるのがジャン・
ポール・ベルモンドとブル・ブル
「史上最大の作戦」でようこそ連合
軍と寝巻姿でフランス国旗を出す役
の俳優さん、展開の中で、コメディ
ーを盛り上げています。ジャン・ポ
ール・ベルモンドは「いぬ」(犯罪映
画でパズルのような展開)「追悼のメ
ロデー」(地味な復讐劇)「警部」
(警察の腐敗を取り締まる)あたり
が好きです。

特集

映画の思い出

少林寺拳法シニア流山初石健康クラブ

今回は本紙編集責任者である関田がお世話になっている「少林寺拳法シニア流山初石健康クラブ」の代表者・石井宏明先生（八段）をはじめ、クラブ参加メンバーに声をかけて映画の原稿をお願いしました。題して「映画の思い出」。どんな話が飛び出すか楽しく読んでください。

映画館で至福の時を

石井宏明

あなたの趣味は？と問われれば、私は躊躇なく「映画」と答えるだろう。

私は最低週に一度は映画館に通い、年間ほぼ60本は観ていると思う。

二週間も映画を観ないと禁断症状に陥るほどの映画好きである。ただ私はテレビやDVDではほとんど観ない。映画館で観ること

に拘っている。映画館の真つ暗な中で観客全員が一つとなって画面に集中する。画面は大きく音響も耳に快く響く。

コマーシャルもなく鑑賞中に、電話や来客の邪魔？も入らない。また映画館は独りで行くのが良い。

感動で思わず涙してしまっても時には退屈な映画で途中で眠ってしまっても隣りを気にする心配もない。

かつて妻と二人で映画館に行っていたことがある。上映中の映画の題名は「眠る男」。二人で仲良く眠っ

てしまった漫画のような懐かしい思い出もある。その妻も今はあの世で静かに眠っている。

とにかく映画館は私にとって至福の空間である。

私の母は浅草生まれの浅草育ち。浅草六区に映画館が軒を連ねていた頃、六区に通いつめて田谷力三の浅草オペラや阪妻（阪東妻三郎）や長谷川一夫、エノケン（榎本健一）、田中絹代の映画はよく観たと言っていた。特にお気に入りの方ターは当時のイケメン俳優 高田浩吉であった。歌も歌える芝居もできる時代劇スターで、母はブロマイドを何枚も持っていた。

私もそんな母の血を受けたのか、子どもの頃から当時住んでいた杉並の高円寺で近くの映画館によく通ったものである。

当時の私はアラカン（嵐寛寿郎）や市川右太衛門、片岡千恵蔵などの時代劇に熱中していた。高校時代は中央線で国立まで通い、帰りは時々阿佐ヶ谷で途中下車して洋画専門館オデオン座で好きな西部劇やミュージカル映画を観て帰った。

現在はジャンルを問わず暇ができれば映画館に通っている。

映画を通じて友だちもできた。

私は政治家とはほとんど付き合いがないが、たまたま映画マニアの流山市議Mさんとひよんなことで知り合い、会えば必ず最近観た映画の話で会話が弾む。私は勝手に「シネ友」と呼んでいるが、会っても政治の話は全くなく映画談議で花が咲く。

また最近、大学のOB会で知り合った私より数段上の映画通、本誌の編集長関田さんとの縁が生まれた。

現在少林寺拳法の仲間として週に2回は会っているが、会えば必ず最近観た映画の話で盛り上がる。私が見た映画は既に関田さんが観た映画が多い。話題の映画を関田さんより一足先に観ることが今の私の生甲斐である（笑）。

最後に、私がかつて観た映画のベスト10を挙げてみたい。数ある候補作の中でベスト10を選ぶのに難渋したが、思い出すままに選んだのは次の10作である（年代順）。

- ・東京物語（1953）
- ・シェーン（1953）
- ・道（1954）
- ・二十四の瞳（1954）
- ・ウエスト・サイド物語（1961）
- ・キューポラのある街（1966）

「少林寺拳法シニア流山初石健康クラブ」は、一般財団法人少林寺拳法連盟の管轄下にあり、少林寺拳法の技法のエッセンスを取り入れた手軽な運動により、健康増進を目的として活動しています。流山市立常盤松中学校・武道場で週2回（火曜・木曜、夜7時から1時間半）、流山市コミュニティプラザで週1回（金曜、朝10時から1時間半）練習しています。

2)

・サウンド・オブ・ミュージック (1965)
 ・燃えよドラゴン (1973)
 ・芙蓉鎮 (1987)
 ・マダム・イン・ニューヨーク (2012)

思いつく限りながら10作を選ぶのに苦労したが、結局選んだのはリピーターとして観たい映画ばかりである。その他寅さんシリーズや釣りバカシリーズも捨て難いし、最近では「ライオン 25年目のただいま」や「ラ・ラ・ランド」にも感動した。

最近の映画は純粋な映画ばかりでなく、シネマオペラやシネマ歌舞伎、そして歌手のライブまで多岐に及んでいる。

私ももう若くはないが、せめて動けるうちはこれからも映画館のシートで至福の時を過せることが今の私のささやかな願いである。

◇

【石井宏明氏のプロフィールブックの代表者。八段。趣味は多彩。大東流柔術、杖道、テニス、スポーツ吹き矢、コーラス、英会話、中国語、オカリナなどなど】

映画と女優と音楽と

柳橋和郎

中学2年か3年だったかろう覚えなのですが、友達に誘われ「誰が為に鐘は鳴る」を近くの繁華街、蒲田の映画館に見に行きました。日本での公開は1952年です(アメリカ公開は1943年)。友達にはノーベル文学賞のヘミングウェイの小説を映画化し、アカデミー賞(助演女優賞)を取ったこの映画の評判を知っていて見たがつていたのですが、自分は何も知らずこの名画を見終わっても何だか内容を良く理解できず、ただショートカットの女優が妙に気になりました。これが初恋の女優イングリッド・バーグマンです。その後また同じ友達から加山雄三の映画を見に行こうと誘われ、また蒲田に見に行きました。2本立てで「バンコクの夜」と「アルプスの若大将」でした。その時も加山雄三が若者に人気がある事も知らずに行き、やはり映画の内容はあまり理解できませんでした。でも加山雄三が妙に気になりました。その

後テレビでエレキギターを演奏して歌う加山雄三を見てエレキサウンドが大好きになり、若大将にあこがれ、音楽とスポーツが好きになりました。そして今60才を過ぎても趣味のエレキバンドで演奏をし、下手ですがスポーツをやり楽しんでいきます。高校生で見に行った映画に「電撃フリンントGO!GO作戦」があります。007の二番煎じを狙って沢山つくられたスパイ映画のひとつです。これも本家007を知らずに友達に誘われて見に行つた初めてのスパイ映画でした。いまは無き渋谷のパンテオンに見に行きました。スクリーンは今となってはびっくりするほどの大きさです。また映画の内容は良く理解しませんでした。ただ主演のジェームズ・コバーンの空手のような振付が妙に気になり、家に帰って足蹴りばかりしていました。ずつと後で知りましたが、この振付は当時無名のブルース・リーだそうです。今見るとこの作品はギャグ有、パロディ有でネイティブの人はゲラゲラとお腹をかかえて笑って見たのではないかと思います。同じ友達に「バーベラ」も誘われやはりパンテオンで見ました。ちよつとエロチックな

SFですがジェーン・フォンダは美しく魅力余すところなく出しています。特に映画の始まりの部分のジェーン・フォンダの映像これだけでも見る価値有です。しかし監督のロジェ・バディムはブリジット・バルドーと結婚し、カトリヌ・ドヌーブには子供を作り、この映画を作った時は主演のジェーン・フォンダと結婚していてという許せない男でした。美人泥棒です。そして人妻ジェーン・フォンダにも恋をしました。この友達には旗の台にある3本立ての名画座にも良く誘われ定期的に行くようになり、スパイ映画を中心に沢山の映画を見るきっかけになりました。「007 ロシアより愛をこめて」を見てはダニエラ・ビアンキに恋をし、「リオの嵐」を見てはミレーヌ・ドモンジョに恋をし、「唇からナイフ」をみてはモニカ・ビッティに恋をし、いろんな女優に会えますが、良い音楽と会えるのも映画です。サウンドトラックのレコードを買うようになり、レコードを聞いては映画のシーンを思い出していました。映画音楽は名曲がいっぱいあるアーチストが演奏しますが、やはり原曲のサ

特集 映画の思い出

ウンドトラックが好きです。「寒い国から帰ったスパイ」はスーパヒーローのスパイ映画と違い、さらに内容を理解できませんでしたが、007で知られるジョン・バリーの作ったウェンズデイズ・チャイルドというテーマ曲は美しく素晴らしい曲です。「007は二度死ぬ」は封切で見て浜美枝に恋をし、当時「浜美枝におまかせ」というラジオ番組を持っていた、夜の10時ごろ毎日10分ぐらいの短い放送だったと思いますが楽しみに聞いていました。その中で「3掛ける3は1なのに $1/3=0.333333\ldots$ 」に3を掛ける $10.999999\ldots$ で1ではない、どっちがほんと？と言っていたのをいまだに覚えています。たしかにと思い数学の先生にそれを質問したら1とはそういうものでそれが数学だと言われました？？音楽というこの旗の台で「ビートルズがやって来る／ヤア！ヤア！ヤア」を見て人生観が変わりました。ビートルズは世の中で騒いでいたので逆に興味を持たなかったのですが、たまたま見に行った映画3本立てのうちの1本としてやっていたので見ま

した。白黒の映画でビートルズの四人の日常をドキュメンタリー風に演出したのですが、4人の自由奔放なパーソナリティとユーモアは魅力があり、虜になりました。またこの映画のスラップスティックで喜劇的なところがすごく面白く、演奏シーンも素晴らしい、ビートルズマニアとなつてしまいました。またちょうどそのころ慶応大学に行った高校の先輩が大学受験について学校に講義に来ました。先輩はビートルズのようにロングヘアーでかつこよく、規則、規則でしばられていた高校生からすると、自由の象徴のように見え、大学に行ったら絶対にビートルズのように髪を伸ばすときめました。回りの皆も同じだったようです。大学に行くと友達に誘われてというより1人で映画に行くようになり、坂本九が最高の映画と言っていた「ローマの休日」が渋谷の東急名画座でやっていた時見に行きました。純粋な恋に感動、映画では身分の違う二人は別れるしかなかったのですが、こんな楽しいデートができたらずばらしいなと思っていました。やはりオードリー・ヘ

ップバーンには恋をしました。この映画は終わつてもしばらく誰一人と席を立ちませんでした。皆感動の余韻にひたっていました。新宿三丁目にあるマニアックな映画館アートシアター新宿文化にも見に行くようになり「ポリ・マギーお前は誰だ」を見ました。この映画も内容はよく理解できませんでしたがマヌカンという言葉を初めて知りました。カラー全盛の時代なのにわざわざ白黒で撮影した映画が逆に芸術的で良かったです。フランス語で歌われるレ・トルバドゥールの主題歌がなんとも言えない雰囲気を出していて隠れた名曲です。「華氏451」もこのシアターで見ました。「華氏451」とは本が燃える温度で本を持つ事を禁止される未来の世界を描いていて本を持っていると突然警察？に乗りこまれ没収され燃やされてしまいます。やはり映画の内容はよく理解できませんでした。その後もいろいろな映画を見、社会人になっても新聞や週刊誌に書いてある紹介を見てはこれだと思ふ映画を見に行つて、相変わらず素敵な女優に恋をし、素敵な音楽に出会

っています。しかし見た時は内容を理解できず、見た後調べてそうなのかと、いまだに後から納得している次第です。



【柳橋和郎氏のプロフィール】稽古場に風のように現れて風のように去っていく。エレキバンド「アングルシャドーズ」のベース。近年はカメラとペンを手に市内を駆け回っている。その他の趣味はテニス、英会話】

リーダーたるには

土田博志

私の日常生活では聞き取る程度の話し声でもコミュニケーションは支障が無いので大声を出す事は苦手でした。

しかしながら、仕事場は想像以上に騒然とし、普段の倍の声をさなければダメだと示唆されました。

実際に、現場は独特の雰囲気では危害が及ばないように人々は遠巻

少林寺拳法シニア流山初石健康クラブ

きに見守り、怒号や野次が飛び交い、何んとも言えない異様感と興奮状態に包まれます。

その中で活動は、普段の声では役立たず我が身と同僚を守る手段として、大声で周囲に危険等を知らせる必要性を肌で感じ、声を出す事で自分の気持も沈静します。

それ以降の現場では、安全確認の指差呼称は人一倍の大声を出し、冷静さを保持し行動に移せ自信が生まれました。

では、私の仕事に関係し影響をもたらした映画があります。

一つ目は、「タワーリング・インフェルノ」です。

近年、日本各地に数多くの高層建物が建築されていますが、高層建物火災を題材として取りあげ先駆となった作品です。

火災原因の電気配線の不具合、消防設備の不備等が次々と露呈し、火災の拡大、避難のタイミングが遅れ、状況が最悪の方向に進み救助を待つ間にも迫る炎と煙に、パニックに陥り様々な葛藤が表現されています。

ステイブ・マックイーンの出陣隊長は、火災現場での緊張感あふれた表情で、体を張って消火する姿勢や火が消えない焦り、活動

による疲れ、炎の高熱と煙との恐怖など場面場面で適切に演じています。

この作品で、高層建物火災の消火や人命救助の困難さ大変さが理解出来ますし、活動する消防隊を見ていると体が熱くなり力が入ります。

二つ目は、「Uボート」です。

潜水艦と駆逐艦の闘いで、互いに魚雷と爆雷の応酬、戦闘中の艦長と乗組員の強い絆、艦内での張りつめた緊迫感、恐怖心、精神力の強さが試されるお互いのせめぎ合いが、映像を通してひしひしと伝わり、指揮者の腹のくくり方とリーダーシップを学んだ作品です。

三つ目は、リメイクが作られている「飛べ！フエニックス」です。砂塵に巻き込まれ、プロペラ機が操縦不能になり砂漠に不時着し、

数多くの苦難を乗り越え、食料と水も不足し灼熱の中で部品を寄せ集めての組立て作業から、単発飛行機を作り上げ脱出するストーリーです。

絶対に助かる希望を捨てずに、みんなの気持をひとつにまとめて導く機長の行為を教えてください。

この三本の映画は、リーダーシ

ップの在り方、決断力、どんな状況下でも冷静沈着に行動し、時に応じて声を出し奮い起こして行く態度を学び影響を受けました。

映画は、私に強い感動と共感を与え心地よい刺激が有り共有できるものでした。

改めて、映画って素晴らしい、おもしろい。

◇

【土田博志氏のプロフィール】現役時代の仕事の疲れを少林寺の稽古で癒している。雨が降ったり風が吹いたり寒い日は「練習にくるのがいやだった」と言いながらマジメに通っている】

妻は私を映画に誘ってくれない

鈴木伸夫

幼い頃、夏休みの終わりが近づくにつれ私を憂鬱にさせたのが宿題に出された読書感想文であった。今も感想文は苦手である。

そんな私にシニア少林寺拳法で一緒にしている主幹の関田さんから原稿の依頼を受けた。

傍と困惑した、いや大変困って

しまった。そもそも映画館にここ十年間入った事がない、学生時代、授業が休講になった時など、悪友等と新宿、池袋辺りの映画館へ当時流行って？いた「ロマン・・・」と言うやつを何度か観に行った懐かしい思い出があるが、そもそも映画は苦手なのである。

私は映画館に行くとも必ず寝てしまふ、ものの30分ともたない、昔ある時、話題となった映画があり、私が妻を誘って映画を観に行ったことがあるが、誘った私が寝てしまった、それ以降、妻は私を映画には誘ってくれない。

眠くなるのは私の視力の問題があるようだ、私は極端に左右の視力が違う「ガチャ目」であり遠視である、長時間一点を見ていると疲れてしまって眠くなる、だから暗い映画館は苦手で眠くなるのである。

言い訳はさておき映画をそれ程観ていない私が映画の感想を書くのは大変憂鬱であるが、数少ない映画経験の中で思い出を記したい。私の記憶に残る映画は「十戒」である。

映画も大変面白かった、その後の私の人生を決めた鑑賞となった。昭和55年春、当時私が28歳の時、

社内の懇親会で新入社員の女性とある映画の話で盛り上がった、話の流れで一緒に観に行こうと誘ったのが当時上映されていた記憶に残る映画「十戒」である。

観に行ったのは土曜日である、当時は週休二日制ではなく、土曜日は午後2時まで仕事をしていた、上映館は東銀座のテアトル東京と言う映画館である（今はない）、当時、職場は千葉県松戸に在り終業後4時過ぎに出た、映画館がある東銀座へ着いたのは上映間際、食事もしないまま入館をした。

映画館のテアトル東京、千人収容との会場にまず圧倒された、座席は2階席であったが土曜日とあってシートは全て満席、スクリーンは左右に大きく湾曲し天井から舞台の無い床まで壁一面がシネラマスクリーンという巨大さ、ステレオ音響効果も素晴らしくまるでコンサートホールに居るような感動を受けた事を今でも覚えている。

「十戒」は映画ファンなら誰しも一度や二度は見たことがある映画だろう、くどくど内容を記す事は避けさせてもらおう。

この映画作品は1958年公開

との事であるが、私が観たのは1980年、テアトル東京が閉館のための「さよなら興行」であったかも知れない。

物語は「旧約聖書 出エジプト記」を原作としているものだが、今でも強く印象に残っている場面は、ヘブライ人の救い主として啓示を受けた主人公モーゼ（チャールトン・ヘストン）が、敵対するエジプト軍率いるラメセス（ユル・ブリンナー）に追われ、民を率いて故郷に逃れようとするユダヤ人たちの前に立ちはだかる紅海、突如紅海が真っ二つに分かれて、海底の道を示す時の衝撃的な映像であった。

現在の様なCGのない時代の映像技術、全編にわたっての実写スケールは壮大であり、古代エジプトの時代セットも細かく描かれており、まるでその時代に私が居るかのような映像であった事を今でも鮮明な印象として残っている。

上映時間は4時間弱と長く途中15分程の休憩時間があった。売店でサンドイッチとコーラを買い小腹をみたしたが、物語の展開が飽きさせず、見応えがあり最後まで

時間を感じさせない映画であった。映画は10時前終ったが、余韻を楽しむ間も無なく慌しく彼女を千葉の自宅まで送り届け、遅い時間に自宅へ着いた苦い思い出がある。幸か不幸か後日、映画の反省会と称して彼女を食事に誘うきっかけとなった映画であった。その彼女が今の妻である。今は、一緒に映画には行っていない。



「鈴木伸夫氏のプロフィール」自稱「虚弱体質」。少林寺拳法で体質改善を図る。座禅や写経などで性格改造を目指している。近年、写真や絵画、陶芸などのゲージュツに目覚めている」

『サウンド・オブ・ミュージック』

大築 猛

学生だった昭和40年半ば頃、日比谷の映画館でどんな映画か判らずに観た「サウンド・オブ・ミュージック」が初めての外国映画で

した。

それまで私は日本映画しか観たことがなく、小学生までは映画好きの両親に連れられて時代劇の東千代之介、中村錦之助、市川雷蔵、特に大川橋蔵はよく覚えていました。中学・高校生の時は映画が禁止だったと思います。学生時代は高倉健が男らしくて格好良くて大好きで、ポスターを部屋中に貼ってましたし、映画館を出た時には高倉健になりきって通りを歩いていたことを懐かしく思い出します。（笑い）

さて、本題に戻ります。スクリーンは1930年代後半のオーストリア、ザルツブルク。遠くに雪が残る美しい広大なアルプス、近くには切り立った山肌に生い茂る新緑の木々、真っ青な透き通った湖、抜けるような青空の下に広がる緑の草原の素晴らしい景色が遠くから近くへとじっくり流れて行きます。そこに、突如、ボーイッシュな髪形のマリア・ライナー（ジュリー・アンドリュース）が舞い降りたかのように現れて「サウンド・オブ・ミュージック」を澄み切った美しい声で歌い踊ります。

「なんて澄んだ声の歌のうまい綺麗な女優さんだろう！」と嘖然として見入ってしまった。そして、「この女優さんの名前はなんているのかなあ」、「どうなっているのだろう」、「ドキドキして観ていた記憶があります」。

マリアは自由奔放で明るく歌の好きな修道女見習いです。これまでに幾度も規律違反を行い、周囲から修道院生活に向かないと思われる。ある日、修道院長から数年前に奥様を亡くした退役軍人のゲオルク・フォン・トラップ大佐（クリストファー・ブラマー）が7人の子供たちの家庭教師を探し求めていることをマリアに伝え勧めます。マリアは不安を抱えながらトラップ邸に向かいます。トラップ大佐よりあなたが12人目の家庭教師であること、そして、子供たちには厳格なしつけをしており、規律通りにしつけるよう命令を受ける。そしてその日、そんな子供たちからいくつかの悪戯の挨拶を受けます。トラップ大佐は急きょ翌日ウィーンに行くこととなります。

つて来ます。マリアは子供たちに歌で「哀しい時、つらい時は楽しいことを考えましょう」と教え、すっかり打ち解け合います。大佐がウィーンに出かけたのち、海軍の制服のような子供たちの衣服をかわいそうに思い、部屋のカートンで遊び着を作り、高原に遠足に行つた時に、ギターで子供たちにド・レ・ミの音階の基礎を教え、また、子供たちが音名を覚えやすいようにと作つた「ドレミの歌」を皆で楽しそうに嬉しそうに合唱する場面は強烈な感動ものです！

数日してマリアと子供たちがボートに乗って川遊びをしているところに、トラップ大佐が婚約者エルザ・シュレーダーと友人マックス・デトワイラーを連れてウィーンから戻ってきます。激怒している大佐に、マリアは子供達に目を向けて寂しさに応えてあげて欲しいと必死で訴えますが、解雇を言い渡されます。その時、家の中から子供たちの合唱する歌声が流れて来ます。トラップ大佐は、はたと自分の教育方針が独りよがりだったことに気付き、子供たち、マリアに謝罪。引き続き家庭教師としてトラップ邸に留まるよう依頼します。マリアと子供たちはエル

ザとマックスを歓迎する会を開きます。歓迎のために練習をしてきた歌の素晴らしさと人形劇の面白さにトラップ大佐は大喜びします。そして、マリアから「次はあなたの番」とギターを差し出され、昔を懐かしむかのように情感をこめて歌い上げる「エーデルワイス」は、この家の忘れていた歌の素晴らしさを取り戻していきます。この場面のトラップ大佐の格好良さ、美しい声、素晴らしい曲に聞き惚れてしまいました。

トラップ邸で客を招いての舞踏会で、オーストリアの民族舞踏レントラーの曲が流れるとトラップ大佐とマリアが流れるような魅力的な踊りを披露します。そしていつしか二人の目が合うと、マリアは「これ以上はもう忘れしました」と言いつて踊りをやめて、顔を赤くして立ち尽くしてしまいます。踊ってみたいなどと思つた素敵なレントラーのステップと二人が見つめ合う情景の感動は今なお脳裏に焼きついていきます。これ以上トラップ邸にいられないと思つたマリアは置き手紙をしてそとと修道院に戻ります。ふさぎ込んで部屋に閉じこもっているマリアに修道院長は「神の愛も男女の愛も同じです。あなたの気持ちを確かめ自分の道を見つけないさい」と言われトラップ邸に戻ります。その晩、トラップ大佐は婚約者エルザに婚約解消を告げます。そして、トラップ大佐とマリアは、邸の庭で互いの愛を告白し合うのです。二人は教会で子供たちや修道女たちに祝福されて結婚式を挙げ新婚旅行に出かけますが、時は、ドイツのオーストリア併合に伴いドイツ軍がザルツブルクに駐屯している情勢下。

愛国者で併合に反対のトラップ大佐は、中立国であるスイスへ一家で亡命することを決意します。そして、映画最後のシーンは、国境線のアルプスを徒歩で合唱しながら越えて逃亡先のスイスへ向かうトラップ一家の姿でした。オーストリアのアルプスの壮大さ、美しさ、マリアの明るさと、心から人を愛する強い気持ち、家族を一つにし、音楽を通してお互いを思い合う心を実現し、そして、その家族の絆が、彼らを戦争という暗いところから救つたように思いました。

のちに、この映画が有名なミュージカルを映画化したもの、そして、あの素敵な女優さんの名前がジュリー・アンドリュースと知り

ました。その後、チャーミングでキュートで美しい声を追っかけて渋谷、新宿、上野他5〜6回観に行きました。この映画をきっかけに名画と言われている外国映画を見漁ろうと思いました。ところが、昭和40年代半ば当時は現在と違って情報媒体が少なく、どこで何

が上映されているのか探すのが大変で、映画館の上映予定掲示板、新聞の映画欄、映画雑誌、くちコミ位しかなく、また、観たい映画が思い通りに近場で上映されていないことが多く、当時住んでいた亀有から一泊掛けて沼津まで観に行ったこともありました。現在は電子媒体の普及で安価で多くの作品が自宅で鑑賞できますが、でも、なんとといっても劇場に足を運んで味わう大画面の包み込まれる迫力と一体感興奮そのものです。しかし、昨今懐かしい名画を上映しているところがめっきり減ってしまつて非常に残念です。いまは「午前10時の映画祭」、「キネマ旬報シアター」の上映プログラムを睨みながら足を運んでいます。

特に好きで何度も観た作品の一部を記してペンを置きます。素

晴らしい映画は私の大事な不朽の名画です!!

「オペラ・ハット」(1936)、「風と共に去りぬ」(1933)、「スミス都へ行く」(1939)、「わが谷は緑なりき」(1941)、「カサブランカ」(1942)、「誰が為に鐘は鳴る」(1943)、「我等の生涯の最良の年」(1946)、「ジェニーの肖像」(1948)、「雨に唄えば」(1952)、「ローマの休日」(1953)、「慕情」(1955)、「旅情」(1955)、「80日間世界一周」(1956)、「王様と私」(1956)、「ベン・ハー」(1959)、「草原の輝き」(1961)、「ウエスト・サイド物語」(1961)、「大脱走」(1963)、「シエルブルの雨傘」(1964)、「ドクトル・ジバゴ」(1965)、「卒業」(1967)、「メリー・ポピンズ」(1964)、「マイ・フェア・レディ」(1964)、「サウンド・オブ・ミュージック」(1965)、「ひまわり」(1970)、「屋根の上のヴァイオリン弾き」(1971)、「タワリング・インフェルノ」(1974)、「クレイマー・クレイマー」(1979)、「フオ

ーエバー・フレンズ」(1988)、「タイタニック」(1997)、「幸せのレシピ」(2007)、「マンマ・ミーア!」(2008)。

◇

【大衆猛氏のプロフィール】古い映画が好き。クラブの飲み会、小旅行などの頼りになる幹事さん】

名場面を忘れるな!

杉山昇

「岐阜〜、岐阜でございます〜、お降りの方はお忘れ物のないよう! またお乗りの方は列車をお間違いないように」。1952年5月×日9時03分発東京行き急行霧島長く太い声で駅員が盛んに拡声器を通して乗客に叫ぶ! 「どうとうその時が来てしまった!」。他人は口を揃えたように「東京に行く! いいな!」と羨ましがった。私はそんなに嬉しくは無かった。多くの友、また入学したばかりの県立岐阜商業高等学校を中途退学し当てもない東京へ行かねば成ら

ない。わが人生で一番辛くて悲しい時がきてしまった。岐阜の町がだんだんと遠ざかる! やがて金華山の岐阜城も見えなくなる。残酷と言えば残酷でもある。夢を叶えよう! そう思ってもなかなか区切りがつかない……見えなくなつた岐阜の街! 微かに岐阜城だけが私を惜しむようにその姿をみせてくれた!

この場面と映画の名場面とを合わせる訳には行かないが……私にとっては一つの名場面? でもある。われわれの時代は西部劇が盛んな時代であった。ゲリー・クーパー、ジョン・ウェイン、タイロ・パワー、ビクター・マチュア、爽快な名場面が幾つも見られた。だがそんな活劇よりも今も微かな記憶に残る名場面があった。

「生きものの記録」(1955年公開)という映画を知っている人はどれぐらいいるだろうか。黒澤明の映画で、100人中知っていると答える人はゼロに近いだろう。内容は、タイトルから察するに、なんかの生きものの研究をしている学者の話のようだが違う。日本に原爆が落ちると怯える小父さん

特集 映画の思い出

少林寺拳法シニア流山初石健康クラブ

がいて、それによってその家族が右往左往するという話だ。30歳の三船敏郎が70歳の老人を見事に演じた。

「一貫して反戦を訴え続けた黒澤明監督が、過熱する米ソの核軍備競争や1954年に起きた『第五福竜丸事件』などで盛り上がる反核の世相に触発されて原水爆の恐怖を真正面から取り上げた異色のヒューマン・ドラマ。町工場を経営する財産家・中島喜一は突然、原水爆とその放射能に対して強い恐怖を抱くようになり、地球上で唯一安全と思われる南米ブラジルへの親類縁者全員の移住を計画する。しかし、このあまりにも突拍子もない行動に対し、現実の生活が脅かされると感じた家族は喜一を準禁治産者として認めてもらうため裁判にかけるのだった。」(allcinemaより引用)

まずは、この映画を観るために必要な核兵器時代背景を調べてみた。

広島・長崎に原爆が落とされて一年も満たない1946年7月1日、アメリカが太平洋のビキニ環礁でさらに大型の核実験を行う。1948年5月14日、アメリカが再び核実験。1949年9月、ソ

連が原爆を開発したと公表。朝鮮戦争勃発から5ヶ月たった1950年11月30日、ハリー・トルーマン米大統領が、朝鮮半島での核兵器使用もありうると発言。1952年、イギリスが初の核実験。同年11月アメリカが、太平洋のエニウエトク環礁で初の水爆実験。1953年8月、ソ連が水爆実験。1954年3月1日、アメリカの水爆実験により、ミクロネシア島民や日本の漁船「第五福竜丸」の乗組員が被爆。9月23日、この時の被爆がもとで、乗組員の一人である久保山愛吉さんが死去。1951年9月、GHQ占領の終結に際して調印された日米安全保障条約により、アメリカは、日本に軍隊を維持する権利を手中に収めていた。

冷戦時代のアメリカの世界戦略によってアメリカも日本に関わらざるをえなくなる。広島に投下された原爆の破壊力は15キロトン、長崎は22キロトン。その後の、急速なスピードで、核の破壊力はキロトン(1キロトン≡TNT火薬千トン)爆発に相当するエネルギー「大辞林第三版」からメガトン(1メガトンはTNT火薬の百万トン)へと進化していく。195

4年3月にビキニ環礁で行われた15メガトンの水爆実験が行われる。ビキニの水爆実験がテレビで流れていたころ、数多くの黒澤映画の音楽を担当している早坂文雄の家で黒澤明はこう言われた。

「こう生命を脅かされているのは、本腰を入れて仕事もできない」

彼は、胸の病気を患っていて何回も生死の狭間をさまよったことがある。そんな彼が言うのだから、それをテーマに、原水爆に脅かされている人間を主人公にしたものを書いてみようとなった。この作品が早坂文雄が音楽を担当した最後の作品になる。当初、黒澤は、核兵器に対しての直接風刺を試みたがそれをするのを止めた。

この作品は、原水爆実験やめろというようなプロパガンダ的なことを語っているわけではない。ひとつの家族に原水爆の思想が介入すること、どのように生き、どのようにに崩壊していくかを語っている。

1954年の水爆事故が映画を作るきっかけになったのだが、この時代の日本人は一部では水爆実験に対しての反対の運動が起き、その後沈静化する程度の問題だった。映画の公開パンフレットには

このように書いてあったとのこと。「この水爆の恐怖を他の動物が知ったならおそらく本能的な行動を起こすだろう。少しでも安全な場所を探しにそこへ向かって種族保存の本能から大移動を起こすだろう。この主人公は人間として欠点だらけかもしれない。しかしその一見奇矯な行動の中に、生きものの正直な叫びを聞いてもらいたいと思う」

狂気に陥った人間が最も正気な人間で、その正気な人間を法律というもので縛り付ける。そのことによって、本当に狂って「ああ、地球が燃えとる、地球がもえとる」と叫ぶ。また、この作品は家族というものが大きなキープointとなっている。この時代では特に、父親という存在が家族の中で象徴大黒柱として崇められていた。だが、その権力をもつても原水爆の怖さを説得することが出来ない。この中島の家族を日本という国家単位で考えるところにくると思う。そうすると、原爆投下という惨劇を過去のものとして忘れ去られていく怖さがメタファーとなっていることが分かる。

この「生きものの記録」が公開された時代は一步間違えれば核戦

争が起りかねなかった。その恐怖を危惧して映画というものの中にメッセージをこめた。その過去の遺産を改めて見直し、人間がどのようににその不安と戦い解決しようとしたのかを知るべきだ。

ラストシーンで医師が淡々と語る。「こんなに各国が核兵器を持ち、一歩間違えば地球は壊滅する。そんな中で平然と暮らす我々が本当に正気なのか?」。映画はここで終わる。

戦争は国の偉い様同士が憎み合い戦争になる。しかし実際に戦争をする若者同士は少しも憎み合っ

てはいない。なのになぜか殺し合わねばならない。

【杉山昇氏のプロフィール】自治会のパトロール隊。自主制作している月刊の「パトロールニュース」(A4判)は130号を突破。趣味はバードゴルフ、グラウンドゴルフ

Outsiderの 映画遍歴 門屋大二

あまりにも唐突な出番です。「シネマ気球」の関田さんとのご縁を先ず申し上げます。サラリーマン時代終始徹底した「損得そろばん勘定」の頭を白紙に戻し左脳・右脳をバランス良く働かせ「未経験領域」を楽しむべく70の手習いを手広く開始して数年。その一つが少林寺拳法。これは「護身武

道」を学びつつ、快適な汗をかき、合間に愉快な冗談が飛び交い、心身の老化防止効果観面でシニア世代に最も適うもの。道を究めた石井先生直々のご指導を受けると言うことは稀有な幸運に思えます。このご指導を受ける顔ぶれは独自のlifestyleを確立して古代インドで言う「林住期」を楽しむ誇らしき人生の達人達。このグループに熱い情熱で食る様に映画を観続ける石井先生と関田さん。このお二方は鑑賞映画本数の多さ・造詣の深さ等々ただただ驚嘆するばかりで暫く映画を離れる

Q & A 青柳 武さん

Q..これまで観た映画で好きな作品は。何本あげてもかまいません。

A..「母と暮せば」「ハナミズキ」「燃えよドラゴン」「ドラゴン怒りの鉄拳」「ゲゲゲの鬼太郎」(実写版、2007)「ペー・パー・ムーン」「シェーン」「大魔神」「妖怪大戦争」(2005)「パピオン」「バラキ」「南極物語」「ベン・ハー」「柳生一族の陰謀」「兵隊やくざ」「ごくせん」「20世紀少年」

「フアンタスティック・フォー」「ROOKIE」「テルマエ・ロマエ」、初期の「ゴジラ」シリーズ

Q..最近観た映画は何か。誰かと一緒に見たか。

A..「サバイバルファミリア」(妻と)、劇場版しまじろうのおお!しまじろうとにじのアシス」(妻、孫と)

Q..好きな俳優は。

A..笹野高史、浅田美代子、佐々木蔵之介、高畑充希、ブルース・リー、萩原健一、川谷拓三、柴咲コウ、根津甚八、佐

藤健

Q..テレビ番組は何かが好きか。

A..「グッと!スポーツ」(NHK)「和風総本家」(テレビ東)「所でんのそこんトコロ」(テレビ東)「世界の果てまでイッテQ!」(日テレ)「笑ってコラえて!」(日テレ)

Q..趣味は。

A..墓参り、食料品の買物

Q..好きなスポーツは。観るスポーツ。するスポーツ。

A..観るスポーツは特になし(スポーツニュースは全て観る)。するスポーツは、スポーツク

ライミング、スキー、スキューバダイビング、シュノーケリング、ボウリング。

Q..休みの日は何をしているか。

A..孫の相手、洗車、庭の除草、布団干し、風呂掃除

Q..好きな食べ物。

A..特になし。一般に流通している食料品は全て食べる。好き嫌いは特に有りません。

Q..ありがとうございます。

(青柳さんは五段)

特集 映画の思い出

少林寺拳法シニア流山初石健康クラブ

と禁断症状が現れると言う程の映画マニア振り。この関田さんから「シネマ気球」に一筆とのはがきを頂き錚々たる執筆陣が揃う中で私の様な「映画outsider」を自認するものが「書く」ことで本紙を汚さないか危惧しつつもこの機会に記憶に残っている「映画」と周辺事情を回想してみたい。

小学校時代授業の一環で4km程映画館まで畦道を歩き観賞した記憶に「名犬ラッシー」「仔鹿物語」、Disney・の名場面が蘇る。小学生がこの様な世界があったのかと驚き、涙さえ流して感動し、ハラハラドキドキした情景を60数年後の現在鮮明に浮かべることが出来るのは小学校の先生方の「幼少期の子ども達にこの映画を見せたい」と言う熱意があったからこそで今更ながら感謝している。この時期は先生頼りの映画見物でしたが田舎の悪ガキも人並みの映画感受性を持っていたと言うことか。敏感な幼少期の映画観賞の重要性を鑑みてやがて孫・曾孫でも連れて映画館通いをして「我が幼少期の記憶に残る映画体験」をさせてみたい。

中高生時代は西部劇一色であった。松山繁華街の裏通りの「銀映」

と言う小さな映画館に通ったもの。西部劇2本立て75円で楽しむことが出来た良き時代であった。圧倒的な雰囲気漂わせるheroが悪玉を痛快に片付ける型通りのstoryではあるが映像で見る荒涼とした西部の光景・大群の牛の誘導・カウボーイの荒々しい活躍・町の酒場でおきる事件・存在感の大きいstarが見せるガン捌き・乗馬術・名脇役の存在感やBGMなど「映画の魅力」に酔っていた様に思う。鄙びた映画館の独特の雰囲気と共に西部劇は「アメリカを垣間見る小さな窓・生の英語に接する機会」として私の青春の重要な一角を占めていた様に思う。日本語サブタイトルには細心の注意を払いつつ英語を聴く。クライマックスで主役が呟く「決め台詞」は覚える程に繰り返し見て声に出して反芻したものである。私が現在尚英語に興味を持ち続けているのもこの時期の「映画効果」で生きた英語に接した経験が大ききく作用している。現在も英語は無二の趣味。当時田舎の高中生にとつて生の英語が聞けたのは映画とNHKラジオ放送の「カレントトピックス」私にとってこの時期に見た映画は言語学習の重要なツールであった様に思う。

ルであった様に思う。仙台上に暮らした4年間。仙台時代の映画と言えは仙台駅前の「日の出劇場」と言う小さな映画館。近くに在った学生がよく集まる食堂やら町の佇まいまでが懐かしく思い出される。「天国と地獄」「七人の侍」「椿三十郎」「用心棒」等黒沢映画の記憶が濃い。完璧に計算された作品・圧倒的なモノクロの世界（一瞬カラーも）・配役の妙・音響効果・思えば天下の黒沢美学の粋を、予備知識も無いままに偶然映画館に立ち寄り、面白くて熱中し2回3回繰り返し観賞したものである。これら映画と出会えたことは今思えば幸運であった。授業に出るのを忘れ山歩きに没頭し東北の山々の魅力に浸っていたこともあって「THE SOUND OF MUSIC」で見たザルツブルク周辺の景勝地と彼方此方に鏤められた「詩情」が生き生きと記憶に蘇る。栗駒山の頂上近くのハイ松に寝袋を敷き顔のみ出して満天の星空を眺めながら仲間がハイモニカで奏でた「THE SOUND OF MUSIC」の劇中歌の数々は正に名作映画の「コマの様であった。この時代に「第三の男」「眼下の敵」「太陽がいつ

ばい」「禁じられた遊び」「OK牧場の決闘」「シェーン」「大いなる西部」「ジャイアンツ」・等々に巡り合っている。「禁じられた遊び」の楽譜を買い求めギターでトレモロの運指に熱中したのもこの頃で山仲間と共に励んだギター練習風景が映画の場面と共に蘇る。この時期も中高時代と同様で「面白くて夢中になった」作品に出合うと何回も映画館に通うと言う私なりの映画の見方があった様である。印象的な場面を鮮明に思い出し多くの場合セリフまで思い出せるのは「これぞ映画」と我流に判定したものは繰り返し繰り返し見てその都度新しい発見をするのが嬉しかったからであろうか。今思えば無意識ながら汲んでも尽きない魅力溢れる傑作に遭遇した喜びを噛みしめて味わっていたのかも知れない。映画から発信される諸々の信号を多様に敏感に受信できる感性と集中力が活発だった若さ故の収穫であった様に思う。今は昔。嗚呼！

社会人時代に映画館で積極的に映画を鑑賞した記憶はない。多忙に紛れ興味を完全に他方面に移した時代であった。映画との微かな接点は海外出張で長時間のflight

ght中の映画。この時期は消極的鑑賞でありながら「CLIFF HANGER」「AIRFORCE ONE」「雪とアナの女王」「フライング・ニモ」・が当時関わっていたビジネスと機中で立てた交渉作戦とが関連して思い出される。

我が「映画観賞履歴」を振り返って見ると映画本数は非常に少ない。その内の数少ない「お気に入り」を繰り返し集的に楽しんでいたことが独特であろうか。少林寺拳法・坐禅・ピアノ・太極拳・果樹園経営・英語・四国遍路・サイクリング・囲碁・テニス（最近開始）等をやや盛沢山に楽しんで

いる現在共通項は「とことん楽しめるべし・Stress free」。最も重要な要素は「我を忘れて没頭できること」。石井先生のお薦めで「天使にシヨパンの歌声を」を五十年ぶりに映画館で観賞。習い始めたピアノ教室で最初に弾いた曲「シヨパン・別れの曲」が劇中終始流れて鍵盤を浮かべつつ聞き入ったことは未体験の面白さでした。関田さんのTV情報で「赤ひげ」「眼下の敵」を観賞し大昔感じた「面白さ」を現在でも同様に感じて懐旧の念に浸ったのもつい最近のこと。TVで映画を楽しむことも今後の一つの方向か。ダヴィンチが弟子に曰く「あの鐘の音

を開け。鐘は一つだが音はどうとも聞かれる」と。人それぞれの「映画道」あるべし。藤村曰く「わきめもふらで急ぎ行く 君の行衛はいづこそや 琴花酒のあるものを」。彼方此方にアドレナリンラッシュを誘う楽しみあり。乾いた喉を潤すオアシスあり。長年忘れ去っていた映画と言うオアシスに立ち寄る楽しみを加えるべきか。少林寺拳法道場で耳を敬ててお二方の囁きを聞こう。そうすれば「面白い映画」に確率高く遭遇すること必定。「隠れファン」として我流の見方でこれを楽しむことにしよう。

今回「映画」に纏わる一連の記

憶を辿れたことは関田さんのお誘いがあればこそ。この様な機会を頂き有難う御座いました。我が行く手に「映画」が見え隠れして来た現在位置を記して、一夜漬けを反省しつつ散漫・冗長・往古茫々のお許しを願いつつ筆をおくことに。
(2017年6月)

◇

【門屋大二氏のプロフィール】愛媛でご母堂と共に果樹園を経営。ピアノを勉強中。リサイタルがいつ開かれるかクラブの面々の楽しみ。最近テニスを再開】

Q & A 田中 稔さん

Q…これまで観た映画で好きな作品は。何本あげてもかまいません。

A…「ベン・ハー」「ローマの休日」「七人の侍」、マカロニ・ウェスタン、etc.

Q…最近観た映画は何か。

A…今日(6/17土)テレビ(BS)で「ベン・ハー」が放映されるので、ビデオに撮って後で見る。これから家内と買い物

に行くので……好きな俳優は。

A…加山雄三、カトリーヌ・ドヌーブ、etc.

Q…テレビ番組は何が好きか。

A…「ためしてガッテン」、時代劇、料理番組

Q…趣味は。

A…テニス、スキー、マラソン、ディンギー、読書、ピアノ(独学)。スキーやディンギーは年1回。
※ディンギーは、一人又は二

人乗りのセール(帆)の船。

日本ではヨットと言いますが、外国ではヨットと言わずにディンギーといい、ヨットと言え、もつと大型の帆船やモータークルーザーを指します。

Q…好きなスポーツは。観るスポーツ。するスポーツ。

A…同右。ラグビーやゴルフは良く観ます。

Q…休みの日は何をしているか。

A…家でゴロゴロしてる。その他、テニス、少林寺拳法、ジョギ

ング。少林寺拳法は職業や性別、年齢にとらわれる事なく、「人として何が幸福なのかを考えながら」健康作りや仲間作りに最適な生涯修行です。御近所の方や友達をさそって元気な人をふやしていければと思っております。

Q…好きな食べ物。

A…さしみ、ウニ、etc. 嫌いな物は有りません。

Q…ありがとうございます。
(田中さんは五段)

生涯一エロ女優

鈴木輝夫

いやはや何とえげつない物言い——。何を隠そう、この物言いは私の造語ではない。東大大学院出の高名なフランス文学者先生の御言葉なのである。正確には「生涯一エロ女優の心意気」と言うのだが……。

彼女の本領を遺憾なく発揮したのは、梅宮辰夫が主演した『ひも』シリーズや『帝王』シリーズや『不良番長』シリーズで、主演の梅宮辰夫を始め共演の山城新伍や安岡力也をヒッパヒッパと言わせる、「あれが好きで好きでたまらず、豊満な肉体を波打たせながら男にいどんでいく大年増役」が白

眉である。「あれが好きで好きでたまらず」の一文は、先に記したフランス文学者の先生の御言葉からそのまま借りた。彼女の本質を余りにも的確に捕えている為、敬意を持って引用させて頂いた。

あれが好きで好きでたまらない大年増の好色女優のその名は、三原葉子——。(好色女優とは言っても、飽く迄、役の上での話だが……) 何を隠そう、私はこのぼてぼての体をした好色女優の大ファンであった。不良性溢れていた頃の東映は、ヒットが見込まれれば、どんな危ない題材でも食欲に手を出した。その意味に於いて実にえげつない映画会社であった。世の良識派や政治権力や警察当局が、顔を顰めていちやもんを付けそうなヤクザ映画やギャング映画は勿論、更には、新東宝張りのエロ・グロ紛いの映画の類も好んでラインに乗せた。

岡市で生まれている。私が三原のぼてぼて好色グラマー(!!)を見始めたのは、昭和四十三年前後であったから、当時、彼女は三十年代後半から四十年代前半であった。不良番長の梅宮辰夫兄にその超グラマーな全身を実に淫靡にくねらせ、兄が閉口するもののかは、「もつとつ、もつとつ」と好色の叫きも卑猥に挑みかかって行くのである。崩れた巨乳巨尻からは巧まざる卑猥感が可笑しくも悲しく立ち上り、その行為自体はエロよりもグロに近いのだが、梅宮の受けの芝居の上手さと三原の攻めの芝居の突出さが、思わず、手を叩いて大笑いして仕舞う様な奇妙な感慨を呼び込んで来る。恐ろしや、エロ大年増女優三原葉子——。資料に因ると『不良番長』シリーズには四本程出演しているのだが、いづれもが決まった様に梅宮の大年増の情婦役で、しかも、四本とも同じ様に「もつとつ、もつとつ」と助平たらしく見るも食欲に迫っている。その時の梅宮兄のセリフも決っている。「太陽っ、太陽っが黄色く見えるっ」。嗚呼……。実に羨ましいっ——。

そして、梅宮主演の『ひも』シリーズも『帝王』シリーズにも数

多く出ているのだが、またまたこれらも彼女の役処は、『不良番長』シリーズと殆ど大同小異である。考えるに、当時の東映には、三原葉子以上の好色大年増女優、詰り、四の五の言わず割とさっぱりスクリーン上にすばつとその裸体を晒して呉れる、年輩の魅惑的で見ることからに助平そうな女優がいなかった事に因るのだろう。実は、三原は我らの健さんシリーズにも出ている。何と何と、あの『網走番外地』シリーズにだ。

確か四本だったと思ったが、何も中々に決まっていた観客達の目を大いに楽しませ、スクリーンに見入る男達の助平心を、その崩れ始めた豊満極まる肉体で挑発し捲る。尤も、その役は昔から得意のストリップパーか、安酒場の荒み切ったホステスか、大悪の草臥れ切った中年の情婦かだが。三原を好んで使ったのは石井輝男。監督・石井輝男と女優・三原葉子の関係は、東映以前からずっと続いていたのだ。監督の石井に取っては三原は実に使い勝手が良かった筈だ。実に、昭和三十年代前半から二人は監督と女優として、多くの映画を作ってきたのだ。

二人は東映子飼いの監督や女優

ではない。では何処かと言うと、例のあの新東宝の監督と女優なのであった。が、新東宝は昭和三十六年、敢えなく倒産の憂き目。男

優や女優や監督達も他の映画会社やテレビにと散って行った。石井輝男と三原葉子は東映に拾われたが、他に東映に入社したのはこれも肉体派の万里昌代、男優では吉田輝雄、寺島達夫などがある。そうそう、菅原文太もかつては新東宝の役者であった。東映専属ではなく身分はフリーと言う形にして、東映の映画に出演した役者達も多かった。『不良番長』シリーズの三原は兎も角、私は『網走番外地』シリーズに出演したときの彼女が大好きだった。あのエロ・グロさその物の猥雑感がたまらなかった。彼女が出演した『網走番外地』の内、私が一番良かったと思ったのは『続 網走番外地』であった。役柄は子持ち亭主持ちの流れのストリップパー。監督と脚本は石井輝男。刑期が満了して網走刑務所を出所した健さんとアイ・ジョージは、青函連絡船で本土に渡ろうする所から物語は始まるのだが、その函館港で流れのストリップ一座とひょんな事から知り合いになる。その一座の中心の花形ストリップ

パーが、亭主持ちで然も子持ちの三原葉子。折しも前夜、函館の銀行が襲われ貸金庫から大量の宝石が強奪される。

そしてその宝石は北海道土産の定番、模造マリモの中に隠匿された。話はその大量の宝石が隠された模造品のマリモを巡って、連絡船内や列車内で擦った揉んだが展開されるのだが、健やアイ・ジョージは出所直後で一文なし、流れのストリップパー一座もその日暮ら

し。更に健達には、彼らの懐を狙って失敗した女スリの嵯峨三智子まで加わる。

健は地元の的屋一家の庭場を借りて売を始める。そこで売するネタがまた凄い。何と何とアメリカ製の七色パンティー(!!)。このシリーズは『網走番外地』シリーズの中でも珍無類さでは、一、二を争う場面だ。私はこんな恰好悪く情けなくて面白い健さんは見た事がない。少々長いがセリフを、DVDから採録する。

「御通行中の皆様つ、御通行中の皆様つ、あたくしはこの度、USAはニューヨークセブンカラパンティー社の全日本代理店に指定されました、橋商会の出張販売員であります。」

「兎も角穿いて御覧なさいよつ、伸縮自在、透けて見えそうで見えない、ナイロンパンティーの特徴だよつ、しかも風通し良くて絶対蒸れないときているんだつ、水でジャブジャブ洗って十分でピーンと乾くって言うんだつ。レディーの下穿きって言うのはこいつの事だよ。アメリカに行つて御覧なさいよ、嫁入り道具の一つなんだからつ」などと更に捲し立て、丈夫さを強調し様として殊更乱暴に扱う。が、そこは悲しい哉、安い擬い物。哀れピンクのパンティーは忽ちズタズタ。そんな突然のアクシデントにも決してめげないのが、我らのヒーロー橋真一。

「ひいっ、こんなになつたらもう諦めなさいよつ、ねえつ、人生は諦めが肝心だよつ」

今までの苦心のネタ振りが割れて、平然と居直る健さん。石井輝男の脚本・演出は本筋とは殆ど関係がない所でもかくも下卑た話を無理矢理押し込むのだが、これをあの健さんが大真面目でやるのだから、その可笑しさには爆笑させ

られる。このえげつなさが石井輝男の石井輝男足る所以。また橋真一は博徒龍神組の若い者なのだから、的屋稼業は稼業違いで絶対にしない筈だ。石井は自分が作つたキャラクターを平気で無視している。そんな細かい所に拘泥しない所も石井輝男らしい。

さて、一方の三原葉子の方は、場末のストリップ興業。座長格の三原は地元の貸元に興業の挨拶に行つたのだが、そこでは土地の旦那衆や小金持ち相手の賭場が立っていた。三原はマネージャー兼トランペット吹き亭主大坂志郎が、酒と博奕には呉々も注意しろとくどい程言つたのに、根が大酒飲み博奕大好きのために遂フラフラと賭場へ。賭場では酒も用意されていたから、次から次へとグビグビ。我を忘れて丁半博奕にのめり込み、忽ちすってんでん。

この辺りから三原葉子の真骨頂。手元の金が無くなるや否や、やおら着ている着物を脱ぎブラジャーとパンティーだけの姿になり、貸元にそれを質草に金を借り様とするも、あまりペラペラの安物の為に彼はそれを渋る。その時、賭場のお客の一人の助平男が、彼女に助平男らしい無体な提案をする。

「ひいっ、こんなになつたらもう諦めなさいよつ、ねえつ、人生は諦めが肝心だよつ」

今までの苦心のネタ振りが割れて、平然と居直る健さん。石井輝男の脚本・演出は本筋とは殆ど関係がない所でもかくも下卑た話を無理矢理押し込むのだが、これをあの健さんが大真面目でやるのだから、その可笑しさには爆笑させ

られる。このえげつなさが石井輝男の石井輝男足る所以。また橋真一は博徒龍神組の若い者なのだから、的屋稼業は稼業違いで絶対にしない筈だ。石井は自分が作つたキャラクターを平気で無視している。そんな細かい所に拘泥しない所も石井輝男らしい。

「穿いているパンティー付きなら、その着物で銭を貸してやってもいいぜっ」

事の成り行きに興味津々の賭場の客達。海千山千のベテランストリップである三原は、強かに酔っ払っている為に糞度胸が付いたのか、客の無体な提案に悪乗りし何のためらいも見せずに、穿いているパンティーをすっぱりと脱いだ。息をのむ賭場の客達。(勿論、映画を見ている観客達も!? 断る迄もなく私も!!) この辺りの演出が、エロを掌中として、観客達の助平心をワクワクさせる術を十全に知り尽くしている石井輝男は流石と思うのだが、そのエロ演出に正に体当たりの演技で答えた、「エロ女優三原葉子」も称賛されるだろう。

身に着けているものがブラジャーだけで、下半身は丸裸のスッポンポンになると誰しもが舌舐めずりして、彼女の股間辺りに好色その物の視線を這わした。あわや、我らがヒロイン三原葉子——。三原は豊満過ぎる肢体を挑発的にくねらせ、悩ましく悩ましく穿いているパンティーに手をかけ、一気に入れを脱ぎ捨てた。嗚呼、南無三——。が、彼女は脱いだパンテ

ィーの下に、何と何と小さなバタフライを穿いていたのだ。につききは小さなバタフライ(!?)。念の為に書けば、バタフライとはストリップやヌードダンサーが恥部を覆う極小の三角布の事。賭場の客達が唾然とする中、出されている徳利の酒を喇叭飲みし、そのままの姿でまたまた丁半博奕。当然として敗け。賭ける金が全くなかった三原は、最後の持ち物である化粧箱を担保に親分から金を借り様とする。その時のストリップ——三原葉子のセリフが振っている。

「裸の商売だけど、化粧前がなければ舞台には立てないっ。命から二番の品物よっ」

当然またまた敗ける。最早すってんてんに成り果てた三原は、ブラジャーとバタフライだけの悩ましくも滑稽な姿で、廊下の椅子に座って自棄酒の徳利を呷る。そこに健さん、アイ・ジョージ、嵯峨三智子の一行が。彼等は例の強奪された寶石が模造マリモに隠され、それが紆余曲折を経てストリップ——三原の化粧箱に入っている事を突き止めたのだ。そこからはチャンチャン・バラバラの大立ち回りが始まるのだが、何故か鬼虎のおやつさんのアラカンまで登場し、

胸のすく啖呵で如何様師どもを射竦める。アラカンは歳を取っても常にアラカン。さて、我らの三原葉子であるが、そんな出入りには我関せずの体。バタフライ姿のまま椅子に座り、只管、徳利を呷り続けている。てんやわんやの騒ぎも健さんの大活躍で、目出度く解決を見せる。不死身の我が健さん——。

『番外地』シリーズでの三原葉子に就いて少々長く書き過ぎた。この項の始めの方で、三原を「あれが好きで好きでたまらず、豊満な肉体を波打たせながら男にいどんでいく大年増」と書いたフランス文学者の事を記したが、流石にフランス文学研究をしている為か表現が秀逸で、彼女を表すこれ以上絶妙な文言はないであろう。御仁の高名は鹿島茂。彼は自分の専門分野で多くの著作を出版しているのだが、映画に就いても一言ある仁で、それが学者が書いたとは思えない程に秀逸な面白さに富んでいるのだ。

に大学院に合格したそうであるが、その後も同じような本数を見続けていたらしい。昭和四十五年ごろの事である。彼は東大大学院の比較文学科で学んだ所謂秀才なのだが、専門分野は兎も角、映画論や俳優論は一意直到の限らない面白さに溢れ返り、思わず抱腹絶倒して仕舞う様なある種のえげつなさに終始している。その明け透けさがたまらなく心地好い。とても東大大学院出とは思えない程の砕け方だ。

私がしばしば引用させて貰った鹿島茂の著書は、『甦る昭和脇役名画館』(講談社・平成十七年刊)と題されているのだが、都合十二名がリストアップされている。私が特に感心したのは、書いている三原葉子を始めとして、荒木一郎、岸田森、佐々木孝丸、天地茂、芹明香、成田三樹夫などなど、各々に秀逸なタイトルが書かれているのだが、三原葉子の場合、先に記した様に「生涯エロ女優の心意気」。因みに岸田森には「孤高のドラキュラ」、天地茂には「横目な色悪」、成田三樹夫には「ホモ・ソーシャルな悪の貴公子」。そのタイトルを見ただけで、思わず全文を読みたくなって仕舞う。

書いている様に仁と私はほぼ同世代であるので、彼が当時見た東映ボルノの多くは私も見ている。

『温泉あんま芸者』、『徳川女系図』、『現代ボルノ伝 先天性淫婦』、『徳川セックス禁止令 色情大名』、『

エロ將軍と二十一人の愛妾』、『狂走セックス族』など……。まだまだあるのだが、殆どの読者諸兄は全く興味がないであろうからこれ以上記さない。当の本人の私も、題名を書き出してみたがその内容や誰が出演していたかまでは、今となっては定かに覚えてはいない。驚く事に、鹿島に因るとその全部の作品に、あの三原葉子出演しているらしい。鹿島はそれをレンタル店のビデオやDVDで、全部見て確認したらしい。恐る可し仁の執念。勿論、この頃の三原は大年増も大年増で、当然として主演はもつと若いピチピチの子で、三原の役回りは嫌みたらしい御局役か、若い主演女優をけちよんけちよんに甚振る性悪女である。

彼女の肢体は流石にこの頃になると、魅惑的な豊満さから腐臭的な肥満さに完全に様変わりして、正直、エロと言うよりはグロと言った方がぴったりであるのだが、

その藪^{くさ}極みの悪臭を放つ奇怪なグロさが「腐る直前の肉は熟れ熟れで大変旨い」ではないが、正に当時の三原にはそんな下卑た様な風情を満々と湛えていた。

特に、梶芽衣子主演の『女囚701号 さそり』(監督・伊藤俊也、昭和四十七年度)や杉本美樹主演の『0課の女 赤い手錠』(監督・野田幸男、昭和四十九年度)はその傾向が凄まじい。両作品とも篠原とおる原作の劇画の映画化であるが、ここまでグロテスクになると、最早、三原は羅刹女^{わさつめ}その物である。前者は女刑務所内でのどんな悪事も為出かす女囚の大ボス。後者は有力代議士の娘を強姦誘拐したグループを匿う怪しげな飲み屋の大飯喰らいの大年増ママ。

両作品とも、肥満した肢体にパンティー一枚だけの姿か、全くのスッポンポンの全裸姿で、無残にも縊り殺されて仕舞うのだ。当時、数多くの三原の出演した映画を見たが、その殆ど総てが同工異曲の役処だ。嗚呼、……。正に鹿島の言う可く、「生涯エロ女優の心意気」——。東映でエロ路線作品に出演していた頃は、三原の映画人生で言わばその後半であり、彼女の前半の女優人生こそ波瀾万丈であつたと言えるだろう。三原葉子は昭和二十六年あの新東宝に入社している。芳紀、正に十八歳。同期入社組には久保菜穂子、高島忠夫、丹波哲郎などがある。ちよつとしたトラブルがあり、実質デビューしたのはその六年後、昭和三十三年の『肉体女優殺し 五人の犯罪者』(監督・石井輝男)。役処はストリップバー。彼女としてはデビュー三作目に当るらしい。新東宝はどんなえげつない題材でも、当ると見込めば構わず製作して仕舞う。

以後、三原は新東宝映画のエロ路線を一心に支えた。与えられる役は、ストリップバー、ヌードモデル、情婦、ダンサー、コールガールなどなどである。相手役は、男優では天知茂、中山昭二、宇津井健、吉田輝雄、丹波哲郎などであり、女優では久保菜穂子、万里昌代、池内淳子、三ツ矢歌子、三条魔子などである。さしもの新東宝も昭和三十六年倒産。散り行く数多の役者達。口惜しがる新東宝エロファン達。

鹿島茂はませた少年だった。昭和三十年代前半、彼は新東宝のエロ路線の映画ポスターや予告編などを見て楽しんでいたらしい。当時と言えども新東宝のエロ路線映画は成人映画指定で、当然、十八歳未満は入場禁止である。『狡知に聞けた』鹿島少年は、エロ路線映画が上映される前の週に映画館に行き、次回上映されるエロ路線作品の予告編を楽しんだ。彼曰く、「予告編は当然さわり集なので、かなりきわどい場面も挿入される。これが目当てだった」。全き賢い。鹿島の物言いに「誘惑」され、最近、私も新東宝時代のDVDを三本程見た。昭和三十五年の『女体渦巻島』、同年の『黒線地帯』、同三十六年の『セクシー地帯』。監督は三本とも石井輝男。

確かに未だ贅肉もなく頗るグラマーで蠱惑的である。無論、昭和三十年代であるので肝心のエロ度数は、現在と比べると極めて低いし、更には昭和四十五年度の東映時代に比べても勿論の事低い。ではあるが、昭和三十年代に若者であつた男達は大いに昂奮したであろう。三原葉子さん、矢張り、あなたは一代の女優であつた——。

完

◇

◇

◇

訃報に功績を偲ぶ

久保嘉之

いているが、思い返すと作品論こそ殆どないものの、リドリー同様に追いかけて観ていたのが、トニー・スコット監督の映像世界であった。

「細かいカットの切り返しや、大仰ともいえる映像装飾」と形容される撮影スタイルや技法のため評論家には受けなかったというが、私には逆にそれらの映像がスタイリッシュに映って、とても好きだった。何より素材の選び方・切り込み方が、現代的でシャープだった。兄のリドリーほどテーマや映像に重厚さはなかったが、私はむしろその軽さに構えずに接することのできる気楽さと、安らぎを覚えていた。おそらくそれが敢えて作品論を書くことと思わなかった、理由だろう。

二〇一二年八月十九日昼十二時半ごろ、映画監督トニー・スコットは、ロサンゼルス港とサンベドロを結ぶヴィンセント・トーマス橋から身を投げ、その生涯に自らの手で終止符を打った。享年六十八歳。目撃者も何人かおり、事務所から遺書と思しきものも見つかっていることから、自殺であることは間違いないと断定され、その理由については手術が困難なほど悪化した脳腫瘍を悲観してのことだ、といわれている。

私はトニーの実兄でやはり映画監督であるリドリー・スコットを追いかけて、その作品論を何本か書

のかと周囲の人たちに疑問を抱かせることになったようだ。

トニー監督が飽くまで、主人公クラレンス（クリスチャン・スレーター）とヒロインのアラバマ（パトリシア・アークエット）のふたりを最後まで死なせずハッピー・エンドで終わらせることに拘つたため、脚本を変更。勝手に変えられてたまるか、怒り心頭に発した脚本家のクエンティン・タランティーンは、脚本の権利を返却させようとしたが、主役のクリスチアンをして「どうかクラレンスを殺さないでくれ」と、タランティーンに直接頼み込ませたため、何とか事なきを得たという『トウル・ローマンズ』然り。

だがタランティーンも根っからの映画人。ハッピー・エンドも悪くない、と思つたかどうかはともかく、続く『クリムゾン・タイド』では、実際に脚本を担当したマイケル・シファアと共に、原案を起こしているのである。この後、彼とトニー監督との厚誼は続いていく。

弾道ミサイル搭載オハイオ級原子力潜水艦「アラバマ」内の、息が詰まりそうなほど閉塞された状況下での物語。ロシアで超国家主義者による反乱が勃発し、首謀者

は大陸間弾道ミサイルを発射できる基地を掌握し、アメリカに対し要求に応じなければ日米を核攻撃すると脅迫してきたのが、発端である。核による報復の対応を命じられたのが「アラバマ」。叩き上げの艦長ラムジー大佐（ジーン・ハックマン）に、エリート・コースを歩む副艦長のハンター少佐（デズレル・ワシントン）。

反乱軍が核ミサイルに燃料補給中の連絡が入り、更に新たな指令が……その指令を受理している最中、反乱軍の攻撃型原潜の攻撃によりフロートイング・アンテナのウインチを損傷してしまい、肝心の《指令》が中断。核ミサイル攻撃準備を続行すべきだとする大佐と、指令を再確認するまで攻撃を待つべきだと主張する少佐。意見の食い違いに、叩き上げとエリート、白人と黒人、様々な思惑が一層軋轢を強めていく。更には敵原潜の攻撃も続いている。輻輳するこの危機をどう防ぐ、どう乗り切る——紛れもなく、手に汗握る第一級の面白さであった。

『エネミー・オブ・アメリカ』。犯罪やテロを防止するという建前で、つい先頃わが日本でも同じような法案が強引に可決された、法

執行機関の監視権限を拡大させる「通信の保安とプライバシー法案」を審議中のアメリカ連邦議会。国家安全保障局の高官レイノルズは法案を可決させるべく、反対派の旗頭である下院共和党議員ハマーリーを、人けのない湖畔で暗殺させる。遺体は思惑通り心臓麻痺で処理され、目撃者はいない筈だった。だが殺害の一部始終は、渡り鳥を観察するために設置された無人カメラに録画されていたのである。数日後、動物研究者ザビッツがそのテープを回収する現場を目撃した部下の報告に、驚き慌てふためいたレイノルズは、迅速なテープ強奪を命じる。ハマーリーが実は殺害されたという事実を知ったザビッツは、知り合いの新聞記者にその情報を渡そうとするが、襲われながら逃げ出す。逃亡の最中意外な場所で大学時代の級友ロバート・クレイトン・ディーン（ウィル・スミス）と出合い、彼にすら気付かれないようにテープの情報をPCカードディスクに移行したものを、託す。ここからディーンは何度も危難に見舞われることになるのだが、最後は彼の機転で、思わぬ結末を招く。——

ウィル・スミスらしく会話がウィットに富み、緊迫した状況ながら巧まざるユーモアが鑲められて楽しく観れるのだが、根底にあるものは国家に絶えず見張られている恐怖、常に監視され続けることへの嫌悪であつたろう。大好きな作品で、何度観たか覚えてないほど。デンゼル・ワシントンと再度タッグを組んだ『マイ・ボディガード』には、クエンティン・タランティノーが絶大な賛辞を寄せている。誘拐される九歳の娘ピタを演じたダコタ・フニングはとても愛らしかったし、誘拐犯の意外性も悪くなかったし、何よりラストのやりきれない寂寥感の上質さは、胸に沁みた。リュック・ベッソン監督『レオン』のジャン・レノにワシントンは負けてなかったし、『マトリックス』ばりの銃撃戦を繰り広げたウォンビン主演イ・ジョンボム監督の『アジョシ』の迫力にも、決して引けは取らない作品だと思っている。

お薦めしたいトニー・スコット監督作品は、まだまだある。ただ、晩年とっていいのかどうか、トニー監督が亡くなる二年前に撮影され、彼の遺作となった『アンストッパブル』や、その前年に制作された『サブウェイ123 激突』（どちらもデンゼル・ワシントン主演）、この二作品は題材の選び方といい、迫力といい申し分なかったし、（大仰ともいえる映像装飾）の技巧にも磨きがかかり、円熟味を増したなどという感じはあつたのだが、なぜか琴線に触れてくるものがなかった。珍しいことである。私の期待感が大き過ぎたのか。

『サブウェイ123 激突』。善玉より悪役を好むジョン・トラボルタの描き方も、金銭に異常に執着する偏執狂としか思えず、平板で翳がない。否、社会に対する恨みつらみが犯罪行為の起爆剤になっているという描写はあるのだが、どうせならそちらをもっと膨らませるべきだったろう。地下鉄車両購入のための視察で、賄賂を受け取ったという疑惑を持たれているワシントンのキャラクターも悪くはないのだが、皮肉なことにトラボルトに強制的に「賄賂を受け取った」と云わされるシーンだけが面白く、こちららもう少しその辺りを膨らませて欲しかった。

『アンストッパブル』は、暴走する機関車を停める為に打つこの手が悉く失敗に終わるという設定は良いし、映像にも迫力がある。だが不思議とそこに人間の介在が感じられないのだ。従って結果、ワシントンのヒーロー譚のような印象を受けてしまう。

映画の醍醐味というものは、微妙なニュアンスの捉え方の違い、ちよつとした匙加減ひとつで、面白くなったりつまらなくなったり、変化していくものだ。しかしながら、観客個々人の好みの違いはあつても、登場人物がしっかりと描かれていれば、些細なこととは気にならないものでもある。いままでの作品に比べ、脚本の推敲・人物像の掘り下げ等、詰めが甘かった。そう思わざるを得ない。

トニー監督の軀を舐みつたつたであろう病魔が、彼の映画に対する情熱と誇り・人間に対する洞察をも、浸食してしまったのであるのか。否、否そうではなからう。今までも、面白いと思えなかった作品はある。兄のリドリー・スコットにして、然りである。偶々二作続いただけのことであろう。それだけにこれからのトニー・スコット監督の映画を観たかった、切に願うのは私だけではなからう。そう思うのだ。

トニー・スコット監督のご冥福をお祈りする。

叔父と甥、そして兄弟愛の物語

『マンチェスター・バイ・ザ・シー』

人は悲しみを抱えながらも生きていかなければならない——。普遍的なテーマを、この映画は叔父と甥の物語として描いた。

舞台であるアメリカ北東部のマサチューセッツ州、マンチェスター・バイ・ザ・シー（以下、マンチェスター）は、島々が点在する海辺の町だ。長い名前だが、プログラムによるとこれが町の名だそう。もとはマンチェスターという名前だったが、同名の町が隣りの州（ニューハンプシャー州）にあり、それと区別するために改名したらしい。イギリスにも同じ名の町がある。そちらの方が有名かもしれない。ちなみにネットによるとアメリカ国内にマンチェスターという町は10カ所ある。地理の勉強を久々にした。さて。

主人公リー（ケイシー・アフレック）は、漁師である兄ジョー（カイル・チャンドラー）が所有する船の上で、その息子5〜6歳のパトリックと仲よさそうに釣りに興じている。場面は一転して雪のボストン。雪かきしているリー。

最初の場面から十年後ぐらいか。マンチェスターとボストンは車で一時間半ぐらい離れている。両方の町とも北米の東端に位置し、緯度と言うと日本の青森ぐらい。故あって今はボストンで暮らしている。水道管修繕などの仕事で「便利屋」として生計を立てている。仕事が終わると酒場で陰気臭く酒を飲み、見も知らぬ客に自分を見ていたと因縁をつけて殴りかかるような男である。

ケイシー・アフレックは、もとも何かをやらかしそうな危険な雰囲気をもった俳優だ。物語がまともな方向にはいかないことを予感させるのははら感身を身にとっており、それが魅力でもある。今回はそうした危険をはらんだ男になってしまった理由とその後の姿が描かれるわけだが、過去を抱えた男という設定の演技と元々もっている独特の雰囲気がこの映画ではうまく生かされたのだろう、今年のアカデミー賞主演男優賞に輝いた。異論のないところだ。作品賞にもノミネートされており、受賞してもおかしくない出来栄だ。受賞作「ムーンスライト」より、こちらを私は推す。脚本賞も受賞、物語に破綻はない。監督・脚本

ケネス・ロナーガン。リーは兄ジョーの訃報を受けてマンチェスターへ戻ってくる。かつて釣り遊びをした甥パトリック（ルーカス・ヘッジズ）は16歳になってアイスホッケーで汗を流したり、バンドを組んでエレキを弾いたり、女の子と遊んだり青春を謳歌している。父親が亡くなつて、あと2年間18歳になるまでは叔父のリーが後見人になって面倒をみなければならなくなる。心に傷をもつ叔父と独り立ちまで間がある甥が現実はどう対処していくのか。

10年前、リーは妻（ミシェル・ウィリアムズ）と3人の幼子がいって幸せな日々を送っていた。また兄のジョーはもともと心臓が弱くベッドのなかで寿命はあと5〜10年と医者から宣告されていた。その場には彼の妻もいた。過去において兄弟たちに家族も含めて何があったのか。過去のドラマが随所にインサートされてドラマは進んでいく。

リーはマンチェスターのジョーの家で甥と一緒に生活すれば何とかなりそうな雰囲気だ。ただリーはその町で起こったつらすぎる出来事から精神的に逃れられない。

甥を連れてボストンで生活しようと考えてるが、甥は今の場所での楽しい生活を失いたくない。二人の葛藤がある。この映画のいいところは、安易なハッピーエンドにしないところだ。この映画に限ったことではないが、そうした終わり方の方が無理がないしリアルであるし静かな余韻もある。ラストシーンも印象的だ。リーと甥は釣り糸を垂れる。カメラは二人の後ろ姿を捉える。

兄ジョーは、リーのつらい思い出を十分に承知していたが、その上で自分のいずれは訪れる死を覚悟して、その後のパトリックの世話をリーに託した。後見人という責任の生じる立場はリーには負担ではないかと危惧もあったであろう。そこには、再生できるかどうかはわからないが、今のままではいけない、必ずやリーは再生する再生してもらわなくては困る、再生しなければならぬ、立ち上がれとの兄ジョーの強い期待があったはずだ。これは兄弟愛の物語でもある。（関田孝正）

【編集後記】今号は、私が練習に通う「少林拳法シニア流山初石健康クラブ」のみなさんにも原稿をお願いしました。ありがたうございます。それぞれの人が柄がにじみ出る文章で、よかったです。（関田）